

大阪府断酒会

五十年

一般社団法人 大阪府断酒会

大阪府断酒会 五十年 目 次

ご挨拶	1
一般社団法人 大阪府断酒会 代表理事	伊藤 聡
公益社団法人 全日本断酒連盟 理事長	中田 克宣
祝辞	2
大阪府知事	松井 一郎
大阪市長	吉村 洋文
堺市長	竹山 修身
50周年によせて	4
新生会病院 理事長	和気 隆三
新阿武山クリニック 医師	平野 建二
ひがし布施クリニック院長	辻本 士郎
50年のあゆみ	7
思い出の記	18
二代目会長	石野 健夫
二代目会長夫人	石野 淑子
三代目会長	濱野 良造
三代目会長夫人	濱野 喜美江
歴代会長に聞く	22
四代目会長	菅原 春雄
五代目会長	堅田 英雄
六代目会長	野村 貞夫
七代目会長	伊藤 聡
報道をたどる	27
50年を振り返る	41

道半ばで、お亡くなりになった方のご冥福をお祈り致します

ご挨拶

創立 50 周年を 迎えて

一般社団法人 大阪府断酒会
代表理事 伊藤 聡



大阪府断酒会が創立 50 周年を迎えましたことを、皆様と共に心よりお慶び申し上げます。

これも偏に行政、医療等関係機関の皆様方、並びに朋友断酒会の皆様方の温かいご指導と支援のお蔭と厚くお礼申し上げます。また、発足以来の諸先輩方及び家族の方々の並々ならぬ努力の賜物と肝に銘じております。

浜寺病院内の月 2 回の例会で発足しましたが、現在、例会開催は年間約 5,000 回、延べ約 8 万名の参加となっています。大阪府内各地域における会員、

家族の日々の奮闘、努力により酒を止めたい人、断酒会を求める人に身近な場を提供できております。

断酒会と一緒に酒を止めて行くための集まりです。手足を縛られて無理やりの禁酒ではなく、自らが納得できる生きがいを感じられる日々を送る事を目指し、酒害の当事者が互いにその息吹を送りあう会であると考えます。

一人でも多くの方が酒害から解放されることを望んでいます。その望みの実現に向けて、今、酒害に苦しんでいる人への呼びかけに、より一層励んで行きたいと思えます。

今までの 50 年の歩みをこの上ない宝物とし会員一同、現状の酒害問題に対して創意工夫し、大阪府内での断酒会活動を展開していく所存です。

大阪府断酒会 50 周年に寄せて

公益社団法人 全日本断酒連盟
理事長 中田 克宣



大阪府断酒会が創立 50 周年を迎えられましたことに心からのお祝いを申し上げます。

大阪府断酒会は、昭和 41 年に発足、昭和 43 年に全断連に加盟され、以後、急速に発展、全断連の中核断酒会として酒害者の救済と社会的貢献に努めてこられました。

この間、会員数全国最大の断酒会としての活動は目覚ましく、行政・医療との緊密な連携体制による酒害者支援・救済のための三位一体方式の確立、44 年間にわたる酒害相談講習会の絶え間ない実施など輝かしい実績を残してこられました。

平成元年の全断連全国（大阪）大会で、大阪城ホールを 7,000 人を超える参加者で埋め尽くしたことは、

いつまでも忘れられない語り草として伝えられてきております。

近年、断酒会は会員数の減少と、それに伴う断酒会活動の停滞現象に直面しており、大阪府断酒会も例外ではありません。しかし、平成 25 年に成立したアルコール健康障害対策基本法では、行政・医療・自助グループ等を中心とした様々な領域による地域連携を軸にアルコール関連問題解決のための施策と酒害者支援の実現をめざしています。

三位一体方式の例を挙げるまでもなく、大阪府断酒会には地域連携に歴史的な実績があります。全国に先駆けて、断酒会が直面する課題を速やかに乗り越えられ、新たな発展への「かがり火」を焚いていただけるものと期待しております。

この機会に、50 年史を編纂されましたが、これは断酒会の輝かしい歴史を伝える貴重な財産であります。

この 50 年史が次なる 100 年史へと編み継がれていくことを確信いたしますとともに、大阪府断酒会のさらなるご発展をお祈り申し上げます。

祝 辞

祝断酒会 50 周年

大阪府知事
松井 一郎



一般社団法人大阪府断酒会創立 50 周年を迎えられましたことを、心よりお祝い申し上げます。

大阪府断酒会におかれましては、創立以来 50 年の永きにわたり、アルコール関連問題の啓発をはじめ、第一線においてアルコール依存症の方々の社会復帰の支援や再発防止などに努めてこられました。また、地域断酒会の活性化を図るとともに、各連合会の活動充実に向けてご尽力されるなど、これまでの貴会の活動に対しあらためて敬意を表します。

さて、近年、アルコール関連問題を取り巻く状況は大きく変化し、平成 26 年 6 月に、アルコール健康障害対策基本法が施行され、同法に基づき、平成 28 年 5 月にアルコール健康障害対策推進基本計画が策定さ

れました。このことは、皆様方の長年の活動が実を結んだものとお聞きしております。

本府においては、第 2 次大阪府健康増進計画において、全ての府民が健やかで心豊かに生活できる社会の実現を目指すこととしており、今後、アルコール健康障害について、正しい知識の普及や相談支援体制の整備など、様々な対策を進めていく計画を策定する予定です。

しかしながら、アルコール関連問題に関する取り組みは、行政のみならず、地域の皆様と協働して進めていくことが不可欠であり、地域で地道に活動を進めてこられた貴会の果たす役割はますます大きくなっていくものと考えております。

貴会におかれましては、今後とも、自助グループとして、アルコール関連問題にかかる啓発や、アルコール依存症の方々への一層の支援にご尽力いただきますとともに、本府の各種保健施策の推進に対しまして引き続きご理解とご協力をお願い申し上げます。

結びに、貴会のますますのご発展と会員の皆様のご健勝とご活躍をお祈りし、お祝いの言葉といたします。

祝 辞

大阪市長
吉村 洋文



一般社団法人大阪府断酒会が創立 50 周年を迎えられたことを心からお喜び申し上げます。また、皆様方には、平素から大阪市政の各般にわたり格別のご理解、ご協力を賜り、厚くお礼を申し上げます。

貴会におかれましては、昭和 41 年の創立以来、酒害相談活動の充実にも努められ、アルコール依存症に悩む数多くの方々の社会復帰に貢献されるなど、酒害対策に積極的に取り組まれ、大きな成果をあげてこられました。

伊藤会長はじめ関係の皆様方におかれましては、アルコール依存症者の回復への寄与及び一般社会におけるアルコール依存症への偏見を除くための活動を積極

的に推進され、アルコール依存症に関する社会啓発に努めておられることは誠に意義深く、皆様方のご熱意とたゆまぬご努力に深く敬意を表します。

アルコール依存症の疑いのある方は全国に 440 万人程度がいると推計されており、習慣的に使用していれば、誰でもアルコール依存症になるリスクがあると言われています。また、アルコールは心身への影響のみならず、多くの社会問題との関連が指摘されています。

こうした動きを受け、我が国でも、アルコールに対する包括的な取り組みを推進するための動きが活発になり、平成 25 年 12 月に「アルコール健康障害対策基本法」が成立し、平成 26 年 6 月に施行されました。また本年（平成 28 年）5 月にはこの法律に基づき、アルコール健康障害対策の総合的かつ計画的な推進を図るための最も基本的な計画として「アルコール健康障害対策推進基本計画」が策定されたところです。

大阪市といたしましても、早期発見、早期治療につなげることを目的として各区の保健福祉センターにお

きまして酒害相談や酒害教室を開催するとともに啓発冊子やビラを作成し、アルコール関連問題についての正しい知識の普及に努めております。

ご承知のとおりアルコール依存症から回復するためには、断酒を継続して実行していくことが基本ですが、そのためには本人の断酒への強い意志とたゆまぬ努力が必要不可欠です。ともすれば断酒の意志が挫けそうになることもあります。そのようなときにこそ、体験談を語り合い、同じ苦しみ、同じ悩みを持つ仲間が、励まし合い、助け合いながら、社会復帰を図っていくこ

とが大切であります。このような意味におきましても、様々な活動を通じてアルコール依存症の方々を支えておられる貴会の活動は、誠に意義深いものと存じます。

貴会が、創立 50 周年を契機として今後ますます結束され、酒害に苦しむ多くの方々の心の支えとなつていただきますようお願い申し上げます。

最後になりましたが、貴会の今後のますますのご発展と会員の皆様のご健勝・ご多幸を心から祈念いたしまして、お祝いのごことばといたします。

祝 辞

堺市長
竹山 修身



このたび、一般社団法人大阪府断酒会におかれましては、記念すべき創立 50 周年の大きな節目を迎えられましたことを、心よりお慶び申し上げます。

また、皆様には、平素から精神保健福祉行政をはじめ、堺市政の推進にご理解とご協力を賜り、厚くお礼申し上げます。

貴会におかれましては、昭和 41 年に大阪断酒会として発足されて以来、地域におけるアルコール対策に多大な貢献をしてこられました。この間、酒害活動に熱心に取り組み、アルコール依存症からの回復や再発防止にとどまらず、不適切な飲酒の影響による心身の健康障害（アルコール健康障害）及びこれに関連して生ずる飲酒運転、暴力、虐待、自殺等（アルコール関連問題）の啓発活動に対しても寄与してこられました。

伊藤会長をはじめ歴代の役員、並びに会員及びご家族の皆様のご尽力に対し、心からの敬意と感謝の意を表する次第でございます。

さて、平成 26 年 6 月に施行された「アルコール健康障害対策基本法」の基本理念として、一つは、アルコール健康障害の発生、進行及び再発の各段階に応じた防止対策を適切に実施し、日常生活及び社会生活を

円滑に営めるように支援すること。また、もう一つは、アルコール関連問題に関する施策との連携が図られるよう配慮することが明記されています。

また、近年では、自殺対策の中でアルコールとうつ病との関連が改めて指摘されています。そして、様々なかたちで広がるアルコール関連問題にどう対応していくかが大きな課題となっております。

本市におきましても、アルコール関連問題とこころの健康づくりは重要な課題と捉えており、こころの健康相談体制を整備するとともに、自殺予防の取り組み等を精神保健分野の視点で進めております。

平成 26 年 3 月に策定した堺市健康増進計画「健康さかい 21（第 2 次）」では、生涯にわたるこころと体の健康づくりを図るため、「アルコール」と「こころの健康」それぞれを 7 つの分野別取り組み項目の一つと位置付けて、健康教育や地域における健康相談、啓発イベントなどの事業を実施しているところです。

私は、不適切な飲酒による社会や市民の健康への悪影響が低減され、安心して暮らすことのできる社会となるよう願っています。そのためにも本市は、大阪府断酒会、堺市断酒連合会ならびに医療機関など関係機関の皆様とこれからも連携し、アルコール関連問題への取り組みを進めてまいり所存ですので、引き続き、ご支援、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

結びにあたり、貴会の更なるご発展と、会員の皆様のご健勝、ご多幸を心からお祈り申し上げまして、ご挨拶とさせていただきます。

50 周年によせて

大阪府断酒会 50 年史に
寄せて

新生会病院
理事長 和氣 隆三



大阪府断酒会創立 50 周年おめでとうございます。この 50 年を振り返って今思うことを述べさせていただきます。

今から約 50 年前の大阪の精神医療は「精神医学はあれども医療は無し」といっても過言ではない時代でした。精神医療の現場は約 90% が民間精神病院でしたが、現実には医療ではなくて隔離・保護だった。昭和 40 年代に入退院を繰り返した患者さんが「精神病院の入退院を繰り返す中で心が荒んでいった」と語られたのを忘れることはできません。昭和 40 年に母校（大阪医大）の精神科医局に入局し、民間病院でも勤務したことのある私にとってはとても重い言葉でした。そのような時代に大阪府精神衛生行政に矢内先生がおられました。この先生はとても立派な精神科の医者で障がい者、弱者に目を向けられた先生でした。そして大阪西成釜ヶ崎ドヤ街のすぐ近くにある大阪市立大学附属病院精神科に所属されていた小杉先生が、入院患者さんからの「何とか酒をやめたい」との訴えを真摯に受け止め、矢内先生と相談されたことが大阪に断酒会ができるきっかけとなりました。また大阪府立公衆衛生研究所に学識経験豊かな今道先生が在籍され、大阪のアルコール対策に対する行政の支援の道が開かれ、その後はアルコール依存症専門病院院長として活躍されました。この 3 人が中心となって大阪のアルコール医療を立ち上げることになりました。大阪のアルコール対策ということが 3 人の出会いの機会を作った。まさに天の配材でありました。小杉先生は西成のドヤ街の単身アル中を無視してアルコール医療は成り立たないと考え、単身者の社会復帰に向けた施設作り、また地域断酒会の強化、アルコール医療は病院ではなく地域現場にあると考え行動され、その流れの中で日本で初めての専門クリニック設立から、更にいちご作業所、フェニックス作業所につながっています。大阪では医

療・行政・断酒会の三位一体の連携を合言葉にその姿勢を崩さず現在まで発展してまいりました。三位一体とは言いますが現実には医療・保健・福祉行政・断酒会と考えます。このような支援もあり大阪府断酒会は会員数全国一の地位を不動にして今に至ります。

現在、日本で既にアルコール依存になっている人は 120 万人を超えると推計され、その中でアルコール依存症と診断告知され、専門医療に出会えた人は約 5% と言われています。医療の中ではとても信じ難いこの数字を目にするときアルコール依存症者の置かれた厳しい現実を認めざるを得ません。そこには依存症と分かっているにもかかわらず、依存症が作りだす合併症治療のみで良しとする医療の姿勢もあります。新生会病院は設立して 36 年を迎えますが、アルコール依存症者が数多く入院していると思われる西成の病院からの治療依頼は 1 件もありません。我々はアルコール医療の現場でそれなりに働いてきたという自負もありますが、この大阪でも依存症になっている方が適切な診断医療を受けられる割合は全国平均と変わらないのはいかと思わざるを得ません。この実態を変えるためには我々専門医療機関と断酒会の力だけでは限界がありますが、幸い平成 26 年にアルコール健康障害対策基本法が施行されました。この法律の成立については専門家の働きかけがきっかけですが、全断連が長年アルコール問題議員連盟の結成を促し支援し続けてきたことに加え、この法の成立に向かって名古屋、大阪で千人を超える決起集会を催されたことを考えても、法の成立を大きく後押ししたのは全断連です。この法は与えられたものではなく我々が作った法と認識し、回復への機会をいかに増やし、広げていくかがこれからの課題と考えます。断酒会創立以来ボランティア活動として酒害に悩む人を一人でも多く救うことを目標にし現在に至りますが、今後依存症に陥る人を一人でも少なく、阻止することを新たな目標としていただきたい。

私は昭和 45 年に地域断酒会例会に出席し体験談を聞いたことがアルコール専門医療へのきっかけとなりました。茨木市の精神科病院の中で初めて院内例会を開いた際に司会を地域断酒会の方が務めてくれました。断酒会の協力があつたからこそ私は精神科病院の中でアルコール医療を今日まで続けてこられました。

断酒会と共に今日まで歩んでくれたことを大変嬉しく思っております。50周年を機に断酒会を中心に今後もアルコール対策が力強く発展することを願いたします。

大阪府断酒会の 50 年、 これからの 50 年

新阿武山クリニック
医師 平野 建二



大阪府断酒会が創立 50 年という大きな節目を迎えられたことをお慶び申し上げます。

昭和 41 年、故小杉好弘先生の指導の下に浜寺病院内で大阪断酒会として発足以来、医療・行政・断酒会の三位一体を掲げて全国一の会員を擁する断酒会として発展してこられました。

私は昭和 48 年、当時泉州病院院長の和気隆三先生に連れられて例会に出席したのが最初ですが、入り口に「断酒会」と書かれた提灯が掲げられていたこと以外は殆ど覚えていません。小杉好弘、今道裕之、和気隆三先生という 3 人の先輩は常に断酒会に出席して居られましたので、私も自然にそれが当然のことと思って来ました。特に昭和 52 年に大学病院を辞して、今道先生の下に専門病院で働くようになってからは病院で働く以外に保健所の嘱託、断酒会と大変忙しい日を送ってきました。その中でアルコール依存症の回復には自助集団が不可欠であると確信を深めてきました。

回復とは自助集団に定着しその中でアルコールを必要としない生き方を確立していくことであり、それを側面から支援することが専門家としての自分の役割だというのが私の経験からの結論です。それだけに断酒会はもっと発展していただきたい、もっと魅力あるものになっていただきたいというのが私の気持ちです。

大阪断酒会が出来て 10 年経った頃、一つの停滞期があったと思います。新しく参加してもすぐ来なくなってしまう人々が多く、ことに単身者の定着率は非常に低い状態でした。今振り返ると当時は「体験談に始まり、体験談に終わる」ということがあまり言われてい

ませんでした。近況報告的な話には単身者からの「夫婦者ののろけ話を聞かされるだけ」という反発の声をよく聞きました。記念大会での役員の挨拶も文字通りの挨拶だけでした。

この状況を変えた一つは昭和 48 年、大阪自彊館内に出来た「あすなろ断酒会」の存在であったと思います。自彊館はあいりん地区のはずれにあり、いわゆる釜ヶ崎アル中を何とかしようと作られた施設グループですが、ここに多くの地域断酒会の会員が参加しました。そこでは近況報告的な話は通用せず、自然に単身者、妻帯者を問わず共通した酒害体験が語られるようになったと思います。

もう一つは松村断酒学校の影響です。私も何度か参加しましたが、2泊3日朝から晩まで体験談のシャワーという感じで本当に感動的でした。当時泉州病院院長であった和気先生は多くの卒業生や入院中の患者さんを引き連れて参加されました。次第に地域断酒会からも参加する人が増え、高知県断酒新生会の徹底して「体験談に始まり、体験談に終わる」姿勢が浸透していったように思います。

当時大阪府断酒会の副会長であった濱野良造氏に、今道先生が「濱野さん自身の体験は聞いた事がないですね」と言われたところ、以後大会の挨拶は必ずご自身の体験を語られるようになったのには流石さすがと思いました。

平成の初めは大阪市断酒会が大いに発展した時期でした。当時の会長舛田潔氏は支部の会員数が増えると、同じ区に地区例会を別の曜日に開く方式を始めました。だいたい 1 年後には地区例会の近くに会員が増えるので、いわば暖簾分けのように支部を発足させたのです。

例会には適正な数があるようです。あまり多すぎると緊密な関係が失われ、コップの水のように注いでも溢れるだけになります。その適正な人数を和気先生は「今日誰が来ていないかが皆にわかる数」と言っておられます。

大阪市は支部が増えることで発展しましたが、近年会場費の高騰などもあり、支部数が減少傾向にあるのは残念です。

参加する人の人格に影響を与えるような集団を社会

学では心理集団と云うそうです。断酒会はその典型であると思います。心理集団がうまく機能するための条件は以下の通りです。

- ① 顔と顔を直接つきあわせた、直接的な頻回の接触がある
- ② 言葉や身振りでの交流がある
- ③ 別れたあとも、一人ひとりに対する印象が残っており、「我々は仲間なんだ」という意識がある

これらを断酒会のキーワードで表せば、例会出席、体験談、仲間ということになるでしょうか。さらにこの条件を満たすために様々な工夫が必要ですが、それは断酒会の「指針と規範」特に規範にあります。「指針と規範」はもっと学習、活用されるべきと思います。

以上、断酒会の友人として経験したことを述べさせていただきました。断酒会は近年会員数が減少傾向にあります。時代の要請に応じて変わらなければならないこともありますが、自助集団として堅持しなければならないことは伝えていかなければなりません。私には 50 年先の発展を見ることは出来ませんが、大阪府断酒会がさらに地域社会に浸透しているであろうと確信しています。



大阪府断酒会 50 年史に 寄せて

東布施クリニック
院長 辻本 士郎



大阪府断酒会が 50 周年の長きにわたり、酒害者の更生活動にご活躍され、多くの回復者を生み出したことに医療関係者として心から感謝いたします。それを支えた当事者、家族、支援者、そして亡き先

人たちに敬意を表します。昭和 41 年に浜寺病院で生まれた断酒会は行政、医療との連携だけでなく、福祉施設、介護施設、回復者施設、さらには司法、教育、市民などと密接な関係を持ち、アルコール関連問題への啓発からアルコール健康障害対策基本法の制定まで数限りない発展を遂げてきました。そして「ここを悩む 21 世紀」の時代に、人間として「ここをばぐくむ」価値観を私たちにお教えいただきました。本当にありがとうございます。

私が断酒会を知ったのは、まだ医学生であった 22 歳ごろの昭和 47 年です。東京の大学の文化祭で 2 代目全日本断酒連盟理事長の故大野徹様が断酒会の意義を強調していました。まだアルコール中毒と呼ばれていた時代です。性格異常でどうしようもないと思われていた時に学生にこんこんと体験談の意義を説明していたのが思い出されます。その翌年には、大阪府の矢内先生のご配慮で、和気隆三院長に教えを乞うために泉州病院に実習に行きました。この 1 週間の間に、和気先生だけでなく、今道先生、平野先生に出会いました。患者様から学ぶ姿勢を教えてくださいました。病棟の中で多くの患者さんと話をして、私の人生が決まりました。

その後、患者さんに連れられて、第 2 回の酒害相談講習会に参加しました。その時も故大野理事長が、先生になるな、私は先に酒から覚めた先醒だけだ、と強調していました。その後、大学を卒業し小杉好弘先生に弟子入りをしました。先生は「患者さんが教科書だよ」と言い、患者さんを尊敬することも学びました。多くの断酒会の人々、石野さん、飛田さん、濱野さん、永峰さんなどから「ガツンとくる」話を聞き、アルコール医者として育てていただきました。

この 50 年で変わらないものが沢山あります。その一つは断酒会会員の情熱と謙虚さです。断酒会の仲間を本当に大切にしていますが、長くやめている人ほど謙虚さを忘れていないことに感銘を受けます。もう一つは残念なことですが、アルコール依存症に対する社会の誤解と偏見です。大阪府断酒会がさらに発展し、アルコール依存症が普通の病気で、当たり前医療を受け、普通の病気として社会参加できるような時代になることを願っています。

50 年のあゆみ

◆大阪断酒会創立前の時代背景

酒害者とは、医学的に言えば、アルコール依存症に罹患したものである。医学的にアルコール依存症という病名が用いられるようになったのは、昭和52年、第9回国際疾病分類からのことである。それまでは、慢性アルコール中毒またはアルコール嗜癖という病名が用いられ、わが国では一般に「アル中」と呼ばれ、病人というより反道徳的人格者とみなされていた。このような誤解、偏見は、わが国だけでなく、欧米諸国においても同様であったが、戦後の医学の進歩により、アルコール嗜癖が「病気」であることが明らかにされてきた。また、アルコール依存症は今もなお単に精神科領域の病気とみなされており、その治療はもっぱら精神医療の中で行われているに過ぎない。しかし、戦後70年の間に、アルコール依存症に関する医療及び行政が著しく変化、進歩してきたのは事実であり、特にわが国で断酒会が誕生した前後の時代背景について記しておかねばならないだろう。

わが国における精神医療の進展は、まだ戦後の混乱期であった昭和25年に制定された「精神衛生法」にはじまるといってよい。この法律の主眼は、精神病者を医療機関以外の施設や私宅等に收容してはならないとすることにあった。言い換えれば、精神病を医療の対象とすべきだということを法的に定めたのであって、この点においてこの法律ができたことは画期的なことであった。しかし、当時、精神病者を收容する医療機関は極めて少なく、国は民間に、公的病院に代わって強制的に入院させることのできる精神病院（指定病院）の設立を促した。その結果、昭和30年代から40年代前半にかけて全国の精神科病床数は著しく増加し、昭和30年には4万4千床だった病床数は、昭和45年には25万床になった。

大阪でも、戦後までは府立中宮病院（現大阪府立精神医療センター）のほかに民間精神病院はわずか5ヶ所だった。昭和30年代といえば、精神医療もようやく薬物療法が始まったばかりで、今日のような社会復帰対策はまだ見られず、精神病者は長期の入院生活を余儀なくされていた。一方、わが国は高度経済成長時代を迎え、アルコール消費量の著しい上昇に伴って、アルコール中毒者も急速に増加し、社会問題になりつつ

あった。精神病院に入院している患者の約6～7%がアルコール中毒患者であった。まだ精神医療がほとんど進歩を見なかった昭和40年代初めごろには、病院内での患者処遇面において様々な問題を生じるようになり、ついにはいわゆる不祥事件が起こって社会問題にもなったが、それらの問題にはいつもアルコール中毒者が関係していた。次第に、アルコール中毒者は病院でもトラブルメーカーとして問題視されるようになり、アルコール患者は決して1部屋に集めず、分散收容するのが精神病院の処遇方針だった。

一方では、昭和36年「酒に酔って公衆に迷惑をかける行為の防止等に関する法律」が制定され、その付帯決議としてアルコール専門病棟が設立されることになり、昭和38年わが国で初めて国立療養所久里浜病院に専門病棟が開設された。

同年、当時すでに活躍していた東京断酒新生会と高知県断酒新生会によって全日本断酒連盟が結成された。昭和38年は、我が国のアルコール医療元年ともいべき年だが、その後、久里浜方式のアルコール医療が全国に展開され、断酒会が全国各地に誕生して、その効果が認められるようになるまでには10数年の年月を要した。



全日本断酒連盟 結成大会（写真）

◆AA会の発足

関西で初めてアルコールに対する集団精神療法が行われたのは武庫川病院（現兵庫医科大学）だった。昭和32年、森村茂樹院長（当時）が北欧で酒害者の集団療法と抗酒剤の使用実績を見学して、吉田優先生や子安義彦先生に勤めてAA会（現AAと別組織）を発足させた。

毎週1回（日曜午後2時から4時）に院内例会が行われ、BB会、CC会、DD会と称して退院者の会や家族の会、それらの合同例会がそれぞれ開かれていた。会誌「ともしび」を発行したり12の階梯をはじめとしてAAの文献、パンフレットの翻訳を手掛けたりした。大阪、神戸、池田などにAAの支部ができたが、AA

の真髓も回復のプログラムも十分理解されないまま、試行錯誤を繰り返しながら日本に合ったものに修正してゆく道を模索していた。

◆大阪断酒会グループ

昭和 39 年金岡中央病院（堺市）で土居敏一先生は、患者の自治会「水曜会」ができたときに「共に酒を止める」という姿勢で断酒会の育成に努めた。先生は当時大阪大学石橋分院の研究者として出でられたが、精神科医長の辻先生から、高知の下司孝磨先生（当時下司病院院長）が発行されていた「新聞断酒」によって全日本断酒連盟の存在を知り、つながりができた。

昭和 40 年 8 月全日本断酒連盟の松村春繁会長（当時）が「断酒行脚」で大阪を訪れたとき、西宮の同志小椋淳吉氏と高島照雄氏を訪れて神戸の友好氏とともに長時間にわたり断酒グループ発足の打ち合わせを行った。

昭和 41 年 1 月 9 日大阪市住吉区の高島氏宅で大阪断酒新生会が発足した。全日本断酒連盟松村会長ほか鳥取県断酒会竹本良明会長（当時）夫妻の出席があり、全日本断酒連盟加盟や規約の承認を決議した。その後、例会に全日本断酒連盟松村会長や遠藤事務局長（当時）が出席したり、「新聞断酒」を警察や区役所、保健所、民生委員に配ったり、読売新聞に投稿して断酒の呼びかけを行うなど活発に活動をした。

一方、小杉好弘先生は昭和 38 年頃から大阪市立大学遺伝学教室で「白ネズミにアルコールを注射して、その酔っ払いの程度と個体差或いはアルコールと脳中の糖の消費との関係に専ら興味があり、毎日害のないかわいらしいアル中集団を作り出していた」（なにわ創刊号）が、矢内順吉先生の勧めから、「実験に必要なアルコールに関する雑誌の借用に武庫川病院を訪れ、そこで初めて AA 方式というアルコール中毒者の集団精神療法が行われているということを知った」（なにわ創刊号）

◆大阪断酒会の発足

昭和 41 年、小杉先生が浜寺病院で受け持つことになった「何か特別印象に残る一人の中毒患者」二見泰之助氏を誘ってみたところ、彼はそれから「熱心に武

庫川病院に出かけたり、全国各地の断酒会と連絡を取るなど同志の獲得、会の設立に情熱を傾けるようになった」（なにわ創刊号）

先に発足していた大阪断酒新生会は事実上活動が途切れていたが、同年 10 月 29 日新たに小杉先生、小椋、高島、中野、沢岡、二見の各氏 6 人で発足準備会を浜寺病院会議室で開いた。昭和 41 年 11 月 5 日、新たに「近畿断酒連盟・大阪断酒会」が発足した。

午後 1 時より 4 時まで浜寺病院本館 1 階クラブ室で開かれた発足例会には、小杉先生、二見、沢岡、山内氏他 2 名に院内から石野氏他 4 名や石野氏婦人淑子さんなど家族 3 名が集まった。

例会は毎月第 1、第 3 土曜日に浜寺病院で約 20 名程の参加で行われるようになった。

同年 11 月 26 日、二見、石野両氏が東住吉の山内氏宅を訪ね、かねて検討していた地区別支部の結成の第一歩としてまず東住吉支部を設立することを決め、会場として山内氏宅を借りて例会を開くことになった。

同年 12 月 2 日、東住吉支部例会で大阪断酒会会則の設定の協議が行われ、沢岡氏に一任することを決定した。全日本断酒連盟から事務局長遠藤氏（当時）や鳥取断酒会会長竹本氏（当時）も来阪して激励を貰った。

◆石野氏会長就任と初代会長二見氏の急逝

年も明けて昭和 42 年 1 月 14 日東住吉支部例会でバッジ・会誌の発行を決め、月々 300 円の会費を集めることとし、さらに 28 日には、①近畿断酒連盟本部を浜寺病院酒害相談室に、②大阪断酒会本部を山内氏宅に置くことを決定した。同年 2 月には、5 日の浜寺病院で開かれた本部例会で浜寺病院 1 階に酒害相談室を開設し、毎週金曜日午後 1 時から相談を受けること、また、11 日の東住吉支部例会で役員決定及び規約の承認をし、大阪断酒会本部の看板を山内氏宅に掲示した。

同年 3 月 26 日に浜寺病院（第 1 日曜日午後 2 時から 4 時）山内氏宅（第 2 土曜日午後 7 時から 9 時）大阪市立大学附属病院外来（第 3・4 土曜日午後 7 から 9 時）でそれぞれ例会を開くことを決定した。

同年 7 月 29 日の本部例会で二見会長が辞任をして、

ただ 1 人断酒を継続していた石野氏が新しく会長に就任した。以降、平成 2 年まで長期にわたり会長を務め、会の活動と発展に尽力した。

同年 10 月には、大阪断酒会の設立の趣旨と現況報告を提出するように大阪府保健衛生課から小杉先生を通じて依頼があり、沢岡事務局長が作成した。

同年 11 月 12 日全日本断酒連盟第 4 回全国大会が岡山市山陽新聞社大ホールにて開催され、石野氏以下 7 名が参加して、石野氏が現況報告をした。

昭和 43 年 1 月に全日本断酒連盟に加盟し、同 3 月 16 日の理事会に石野会長、山内副会長が出席した。このとき石野氏が常任理事に選任され、同年 4 月 28 日には大阪市西区の福亭で全日本断酒連盟の代表者会議が開催され、来賓として小杉先生（浜寺病院・当時）米田栄之先生（木島病院・当時）中村朝一氏（浜寺病院 CW・当時）大阪断酒会より石野氏他 13 名が出席した。

同年 5 月 24 日前会長二見氏が交通事故で亡くなられた。大阪における断酒運動の主要なる人物を失ったことは悔いても悔いない限りである。

◆会誌「なにわ」の発行と啓発活動

会の活動を会員や関係の方に知ってもらうために、昭和 43 年 8 月 1 日会員の体験談や病院の先生方からも原稿をいただき、機関紙「なにわ」創刊号を発行し、年 4 回発行することにした。

また、同年 10 月 20 日強化懇談会を開き、創立 2 周年記念大会を開催することを決定するとともに、酒害啓発活動を活発化するため大阪市内に一区一支部を設けることを将来の目標として、とりあえず東住吉支部、北支部、住吉支部、城東支部、阿倍野支部、西成支部の 6 支部を設けた。

同年 12 月 2 日の読売新聞朝刊全国版の家庭欄に木村芳治氏（西成支部長・当時）夫妻の体験談が全面に写真入りで掲載され、14 日には浜田氏夫人が断酒会を関西テレビに PR して、「ハイ土曜日・お酒は怖い」に出演したことで、近畿はもちろん全国的に反響をよんで、その後の躍進の大きな原動力となった。

これに先立つ同年 10 月、新設した婦人部の石野部長をはじめ、木村、亀井、吉松、浜田などの各氏夫人

を中心に新聞社、府・市関係当局へアル中対策の必要性を訴え、断酒会活動の理解を求めた。

昭和 44 年 3 月には NHK テレビ「午後の話題」（断酒会の紹介と啓発がテーマ）に出演し、小杉先生との酒害に関する対談後、会員・家族が体験談を発表した。



◆本部の強化

昭和 44 年 1 月、前年 10 月の強化懇談会で役員の再編を行い、本部強化のため、大阪断酒会本部を大阪市東住吉区の山内良雄氏宅から、西成地区で積極的に活動し、新聞にも大きく報道された幹事の西成支部長の木村芳治氏宅に移転した。

同年 11 月 2 日、大阪断酒会創立 3 周年記念大会を大阪府農林会館で開催し、大阪断酒会の会員 12 名、各地の代表などが体験発表を行った。

この大会を契機として、地域活動を積極的に行うためには、病院内ではなく地域に出ていかなければならないと考え、浜寺病院で行っていた本部例会を、大阪市天王寺区の雲水寺に移して開催することにした。また昭和 45 年 4 月には大阪断酒会として、更に内容を充実した断酒会にするために、幹事の飛田好一氏が事務局を担当することになり事務局の強化を図った。同年 10 月には、雲水寺が大相撲大阪場所の宿舎として利用される関係から常時使用できないことや、また残念ながら例会に参加する会員の中でマナーに欠ける行為などがあって、本部例会場を超願寺（天王寺区）に変更した。

◆婦人部（現家族会）の活動

婦人部は、昭和 43 年 10 月 26 日大阪市立大学付属病院の例会において提唱され結成された。

すでに昭和 35 年に東京で「白菊禁酒婦人会」が活動を始め、高知県断酒新生会でも昭和 37 年「夫を酒から守る婦人の会」が結成されていた。

断酒継続のためには、家族とりわけ奥さんの協力が大切であるということは、松村全日本断酒連盟会長（当

時)の経験から実証済みのことで、この婦人部が大阪においても「アル中の夫を立ち直らせる」のに活躍し、マスコミへの働きかけなどに大きな力を発揮した。昭和44年には「準会員」として、会員に準ずる扱いをし会費を徴収することにした。

昭和45年3月に和歌山断酒道場長婦人 児玉菊子さんを迎えて、初の大阪断酒会婦人部例会が、石野会長夫人(当時)以下30名の参集で、大阪市南部にあった阪南支部の野村氏宅で開かれた。

昭和46年6月に阪南支部で開かれた夫人だけの例会を、石野夫人は「断酒会も会員が増え、知らないお顔が多くなってきましたが、少なくとも支部会員同士は親しく身近なことが話し合える仲であって欲しいという意味もあり、6月9日午後、阪南支部(大阪市)宮武氏宅で、家族のみの例会を行いました。遠く神戸、茨木からも参加があり、出席者12名、新入会員の方たちのご相談という形で、入会してもなかなか断酒してくれないご主人への悩みなど、妻として取るべき態度について話し合い、誰もがみな悩み苦しんだ話のひとつひとつが、励ましになり希望になり反省になったようです。ご主人を交えない、家族だけの例会も、それなりに大きな意義があったことを報告しておきます」と記している。



西川京子氏(昭和52年6月撮影)

昭和49年に豊中保健所で、今道先生が西川京子ケースワーカー(豊中保健所・当時)と「酒害者家族教室」を始めた。目的は「①家族が同じ体験を持つ仲間の中で孤立から抜け出して余裕を取り戻す。②アルコール依存症に関連する正しい知識を学ぶ。③家族関係

を問い直し、被害者意識から解放され、酒害者本人の回復に協力する。④適切な対応を学んで、柔軟に対応できる力を養う。⑤単に断酒を目的とするだけでなく、アルコール依存症に関連して生じた問題の解決や家族のコミュニケーションの回復を目指す」ということにあり、医学的な理論づけと共依存からの脱却プログラムは試行錯誤をしながらも、着実に進歩をしていった。

しかし、断酒会の中では「家族会」の位置づけは、夫の「協力者」としての地位を脱却できず、全断連も

『家族のための回復への指針』のパンフレットを作るなどして、新しい方向を見出そうとしている。

◆院内断酒会と専門病棟

断酒会の例会活動が活発になり、酒をやめ続けられている人が増えてくるに従って、例会の断酒への効果が医療関係者の間で注目されるようになり、病院の治療プログラムとして活用できるのではないかと、浜寺病院の断酒例会を見学された今道先生が新阿武山病院で例会を開かれるようになり、昭和45年1月に院内断酒会「きづな会」が結成された。また藍野病院に専門病棟が、昭和46年には和気隆三先生によって泉州病院に専門病棟が開設されるなど専門医療機関ができてきた。これによって病院の患者が地域の断酒会につながる橋渡しの役割を担うことになった。

昭和46年3月に中村朝一ケースワーカーが亡くなられた。彼は浜寺病院の相談員として、当初から熱心に会の育成と指導に力を尽くされ、また昭和45年から大阪断酒会の顧問として小杉先生と共に、会の人たちに広く親しまれていた。その死は会にとっても大きな痛手であった。

◆アルコール問題研究所の開設

昭和46年5月、大阪断酒会顧問の大阪市立大学附属病院神経精神科医・小杉好弘先生が「かねがね構想されていた」「アルコール問題について、あらゆる立場からの調査研究を行うと共に地域断酒会の育成強化を図り、酒害予防並びに酒害再発予防の啓蒙を行い社会福祉に資することを目的」とし、また「断酒会(集団療法)の効果^{けいもう}を学問的に裏付け、医師自身のアル中者治療の啓蒙に役立て」「特に単身者のアル中者問題に取り組み」「会の脱落者の防止、また、入会前の個別相談所としての活用、会員のサロンの集会所としても利用」することができる場としてアルコール問題研究所が阿倍野区旭町(大阪市立大学附属病院前)に開設された。

この研究所は、医療・行政・断酒会各立場でのアルコール問題についての調査研究、意見、情報の交換など、各機関の連携を円滑にするなど、重要な役割を果たしてきた。

昭和 45 年 3 月から 6 ヶ月にわたって大阪で開催された万国博覧会（通称万博）関係の仕事に当て込んで全国から労働者が大阪に移入していた。万博が終わり仕事にあぶれて、西成あいりん地区に仕事を求め、この地区に溢れ出してきており、酒の勢いをかって何かと警察沙汰を引き起こすことが絶えず、行政はその対策に苦慮していた。アルコール問題研究所に参画されていた大阪市立弘済院の祐野信三係長（当時）は、単身酒害者の最も多い西成区あいりん地区のアルコール対策の一環として、生計困難な単身酒害者が社会復帰を図ることを目的として、専門施設の設置が必要と考え、昭和 47 年 4 月に弘済院に救護第二ホームを開設した。

昭和 48 年にはあいりん地区に隣接する社会復帰施設自彊館に専用の居室が設けられ、いずれも 1～2 年の入寮機関であり、生活プログラムの一環として、施設内外の断酒会例会に出席することが組み込まれ、大阪断酒会、医療機関、保健所、福祉事務所が連携機能することによって、あいりん地区から次第に社会復帰する人たちが増えていった。

昭和 47 年 8 月には大阪府ケースワーカー研修会が、大阪府社会福祉会館会議室で「アルコール中毒者について」という表題で開催され、講師として、アルコール治療に携わっている大阪市立大学附属病院小杉好弘先生（当時）と断酒会活動に実績を上げている大阪断酒会が招かれ、飛田好一事務局長（当時）が出席して、生活保護現業員（ケースワーカー）や府監督生活保護施設職員研修者に、断酒会による集団療法の実績の優れた点をそれぞれの立場から説明した。

◆酒害相談員講習会の開講

昭和 47 年頃より断酒 1 年前後の会員が増えてきたが、またその一方で再飲酒する会員が目立つようになってきた。再飲酒を防止するための必要な知識を身に付けておかなければ断酒の継続は難しい。また酒害相談もそれまでは先輩会員が各自の考えを基にしていたので、酒害についての説明がまちまちで統一されていなかった。そこで酒害相談に応じられるように、大阪府の行政から酒害相談員養成のための講習会が企画提案された。断酒会の中でも慎重に論議検討され、中に

は断酒会が行政の枠に縛られることを懸念し、反対を唱える役員もあった。そこで酒害相談員という名前はついているが、専門家を養成したり、保健所や病院のプロの相談員の肩代わりをすることが目的の講習会ではないということを確認した上で、酒害相談員講習会が実施されることになった。この講習会を通じて、受講者の断酒活動の意識が向上し、ボランティア活動が盛んとなってきた。またこの講習会を契機として、医療機関のみならず保健所との連携がスムーズになり、行政・医療・断酒会のネットワークの基礎ができ、大阪の酒害対策は「三位一体」体制へと発展した。

◆近畿ブロック結成

昭和 46 年頃から大阪断酒会と阪和断酒会友綱との間で定期的に情報の交換や話し合いの場として交流会が持たれていた。もっと交流を広め組織の強化を図るために、昭和 47 年 8 月に、兵庫県尼崎市の尼崎労働福祉会館内に、近畿圏より関係者（三重県、京都府、奈良県、和歌山県、兵庫県、大阪府）が集まり、近畿ブロック会結成について討議され、ブロック間の交流会（滋賀県を含む）を年 4 回開催することや、近畿ブロック結成大会を昭和 48 年に大阪で開催することなどが決められた。そして翌年 9 月に第 1 回近畿ブロック大会が阪和断酒会友綱主管のもとに岸和田市民会館で開催され、大阪断酒会から 130 名が参加した。

断酒会活動により、今まで治らなかったとされるアルコール依存症者の回復が可能なが実証されて、テレビ・ラジオなどで報道されるなどマスコミでも取り上げられる機会が多くなってきた。昭和 47 年 10 月にラジオ大阪で飛田事務局長（当時）との電話インタビューが、11 月には NHK テレビ教養番組の中で、なだ・いなだ先生による「アルコール中毒について」の解説番組があり、広島で開催された全国大会の様子が放映された。また、同じ 11 月、NHK テレビ「大阪の話題」には、飛田事務局長が出演した。これら報道によるマスコミの影響もあって、酒害相談が増え、新入会員が急増した。昭和 47 年の新入会員は 158 名、発足時からの入会者総数は 496 名となった。また、超願寺で行われていた本部例会の会場が会員の増加により会場が手狭になったことや、支部例会の強化、地域でよりき

め細やかな活動を図るため、年度後半より修養団関西会館（天王寺区上宮町）で第1と第3土曜日に行われることになった。

◆第10回全国（大阪）大会の開催

昭和48年の全国大会開催地は、もともと北陸方面となっていたが、事情で開催が不可能となった。そのため急遽、全断連から代替地として大阪断酒会に要請があり、話し合いがもたれた。大阪断酒会としてもまだ十分組織が固まっていないが、これを契機として大きく組織を発展飛躍させるためには、引き受けるべきだということで、第10回全国大会を大阪で開催することが決まった。

前年の昭和47年11月4日、広島で開催された第9回全国大会には、大阪から30数名が参加し、この時「来年は大阪であいましょう」と発表された。この大会の様子はNHKテレビで取材され放映された。

昭和48年8月に全国大会の準備委員会が設置され、会員一丸となってこれに当たった。そして11月25日、第10回全日本断酒連盟全国（大阪）大会が大阪市東淀川体育館で開催された。大会前日には、関連行事として広島大会に引き続き、全国会長会が開催され、それぞれ活動の報告や情報の交換を行い、各断酒会との関係強化が図られた。全国100余りの断酒会から優に2500名を超える参加者があり、躍進する大阪断酒会の力を全国に知らしめた大会でもあった。

この年までに15支部ができていたが、この大会を準備し、実行したことで会員の中から新たなリーダー的活動家を輩出し、彼らを中心に大阪府各地域に新しい支部が次々に開設され、21支部となり、昭和51年には27支部となった。

◆会の発展とブロック制

大阪断酒会に、兵庫県の尼崎支部や阪神支部があり、また大阪府下にも阪和断酒会友綱（昭和42年11月設立）の活動で泉南地区に岸和田・泉南・泉大津・泉佐野と支部ができ、阪和断酒会友綱が活動地盤にしていた。また泉南の尾崎保健所で、府の職員である石神精神相談員が阪和断酒会友綱と連携して酒害相談を始めるなど、行政区画と断酒会組織の重ならない地区があったが、会の活動の上で地域が入り組んでいること

で問題も派生し、また行政の側からも断酒会活動を支援していくには府県を整理統合するほうが活動しやすいのではなかろうかとの勧告もあり、阪和断酒会友綱と折衝、話し合いを十分に行った結果、大阪府下に在住する会員は原則として大阪断酒会に属し、阪和断酒会友綱もいままで手薄であった和歌山県一帯に力を注ぐことが決められた。

昭和51年8月、大阪断酒会は大阪府全域を統合し、その実態を正確に現して総称する名称として「大阪府断酒会」と改称した。

同年9月には阪和断酒会友綱所属の泉南地区の各支部が大阪府断酒会に編入され、また会則を改定してブロック制を導入し、「大阪府断酒会」として行う初めての大会であり、節目の大会でもある創立10周年記念大会（第3回近畿ブロック大会併催）を開催した。

そして昭和52年5月に、地域でよりきめ細かく活動ができるように9ブロック・33支部に編成をし直し、それぞれ地域ごとにブロック結成式を行った。以降各地で急速に支部が新設されていった。

◆ソフトボール

近畿ブロックの会議の中、阪和断酒会友綱からの呼びかけで、昭和51年3月、近畿第1回ソフトボール大会が、和歌山の紀陽銀行グラウンドに6チームを集めて開かれ、大阪からも大阪市堺市などの混成2チームが参加した。この大会がきっかけとなって、近畿各地の断酒会に、ソフトボールの機運がにわかに高まってきた。5月には堺支部にソフトボール部が創られ、その後、各地域でもチームが編成されて、現在は大阪府断酒会で10チームが活躍している。



◆女性酒害者の会

昭和50年頃から女性酒害者が急速に増える傾向を見せ始めたが、昭和51年7月に、今道裕之先生の指導により、公衆衛生研究所に通院していた女性酒害者たちによって、初めての自助グループ「優芯クラブ」が誕生した。女性だけしか語れないこと、また、女性であることで好奇の目で見られること、時間的な制約が大きいことなど、男性の断酒会に馴染めない部分をカバーする役割を果たすことになる。

昭和52年7月29日には、東京と大阪の女性酒害者による合同懇談会が、大阪の修養団関西会館において開かれた。東京からは5名が、大阪から優芯クラブのメンバー14名が参加し、オブザーバーとして、今道先生、飛田事務局長（当時）、公衆衛生研究所の職員が参加した。

昭和54年11月10日、第16回全国（静岡）大会で、第1回アメシストの会が開かれた。

「アメシスト」とは、英語で紫水晶（AMETHYST）のことで、語源はギリシャ語の AMETHYTOS（泥酔から守る）からきている。高知の下司孝磨先生が発行されていた「新聞断酒」のコラム「アメシスト」の名称を、大野徹全断連理事長（当時）が、その名前の由来からして、女性酒害者の会の名称にふさわしいと、下司先生に使用について相談を持ちかけ、女性酒害者の正式なネーミングとして、この時初めて使用された。

昭和55年には藍野病院でアルコール専門病棟が開設され、三好新之祐、天羽薫両先生が担当された。守口保健所においても女性酒害者の会がはじめられ、大阪府断酒会での徐々に女性メンバーが増え、小杉クリニックに通院中の女性も加わって、昭和60年には「大阪アメシストの会」が結成され、同年9月4日、アルコール問題研究所において、女性会員有志15名が参加して例会が開催されて、この例会を当分週1回アルコール問題研究所において昼例会として開くことが決められた。昭和61年9月3日、アメシストの会1周年記念例会をアルコール問題研究所にて開催した。

さらに全断連の事業として、同年9月27日には初めての女性酒害者啓蒙研究会が財団法人日本船舶振興会（現・日本財団）の補助で大阪市生野区民ホールにおいて開催され、一般参加を含めて500名が参加し、

この問題に関する関心の大きさが改めて感じられた。この事業は同時に静岡市（9月27日）、岡山市（10月24日）、福岡市（11月3日）、横浜市（11月23日）においても開催された。

平成元年2月には、第1回「大阪アメシストの集い」が開催されるようになり、以後毎年開催され、大阪のみならず、全国から参加者が集い、研修の場を通して盛んな交流が行われている。また同年7月には初めての近畿ブロックアメシストの研修会が大阪市立婦人会館で行われた。

平成5年ごろより「アメシストの集い・一日研修会」の参加者は130名を超えるようになり、女性酒害者の会員数も増加している。最近では170名を超える参加者となった。

平成24年には大阪府アメシスト例会は、高槻市・東大阪市・岸和田市・貝塚市・大阪市阿倍野の5ヶ所となり、平成26年より現在は高槻市・新阿武山病院内・東大阪市・岸和田市・貝塚市・リカバリハウスいちご長居の6例会場となっている。

◆社団法人の設立

創立10周年記念大会を経て、ブロック制による支部の新設などにより、会の活動も活発になり、組織も整って会員も増えていったが、一般社会には十分認知されるに至っておらず、大阪府から「補助金を交付するにも法人化した方が良い」と指導もあり、また会としても法人であるほうが社会的な認知度が高まるという判断から、以前より懸案であった法人化に向かって準備が推し進められた。そして昭和53年2月19日、設立総会が修養団関西会館で開催された。そこで設立趣意、定款、事業計画と予算案、役員を選任など、社団法人設立に伴う諸案件が会員の熱心な審議を経て可決された。同年3月に関係書類を整え、大阪府知事に提出し、大阪府知事より社団法人が認可され、法務局への法人登記が完了し登記謄本を受領した。

ここに昭和53年4月1日付を以て「社団法人 大阪府断酒会」として大きく飛躍することとなった。

公的に認知された団体となったことで、活動がより易くなった。大阪府の新年互礼会をはじめとして、公的な場に招待され、他の諸法人などと同席すること

ができることは、断酒会のイメージをアップさせることに役立った。これにより行政・医療・断酒会の連携もさらに強固なものとなった。

この時をもって阪神ブロック3支部を大阪府断酒会より分離独立させた。

◆地域断酒会の発展

断酒会にとって地域の独自性の問題や、地域の特性に応じた活動を強化するためには1つの断酒会として独立したほうが、地域の保健所や医療機関、住民との連携をより緊密に活動でき、また地域の自主性を育成するためにも、地域ごとに断酒会として独立したほうが良いということで、将来は1つの市に1つの断酒会「一市一断酒会」を目標にして検討準備を重ねていった。「一市一断酒会」は会の創成期標榜した「一保健所一断酒会」を更に発展させた方針として打ち出されたもので、昭和53年7月の理事会で提案され、昭和54年2月のブロック長会議において決定された。顧問の先生方の了承もあり、同年を準備期間として昭和55年4月に各ブロックを12断酒会・56支部に再編した。こうして支部から断酒会として独立するところも増え始めた。その結果として、地域断酒会活動の成果も顕著になってきた。

昭和61年には17断酒会・75支部と府下全域に活動拠点ができ上がり、同年11月の大阪府断酒会創立20周年記念大会開催に一致団結して臨んだ。また平成元年の全国(大阪)大会の大成功で活動がますます活性化した。

◆第26回全国大会

機関紙「なにわ」などの広報活動や、酒害相談員講習会による酒害者学習、研修会、記念大会を通じた仲間のつながり強化、そして行政・医療・断酒会の三位一体となった活動により、大阪府断酒会は着実に発展してきた。

昭和58年9月18日に創立17周年記念大会(近畿ブロック第10回大会併催)が大阪市中央公会堂で開催された。大会には多数の行政・医療関係者をはじめ、全日本断酒連盟理事長 大野 徹氏(当時)を迎えて、2,000余名の参加者を得て、盛会裡に終わった。この



参加者は当時としては1つの地区の大会としては他に類を見ないものであった。

昭和61年11月30日に創立20周年記念大会を大阪市厚生年金会館で開催した。参加者2,400余名は大阪府断酒会の大会史上最大規模のもので、当時の大阪府断酒会への関心と期待の大きさの表れでもあった。

この年はまた「精神衛生法」の改正が論議された年でもあった。マスコミで断酒会やアルコール問題が多く取材された。1月「ラジオ大阪」3月「毎日放送テレビ」5月に「朝日放送テレビ」そして昭和62年2月に「毎日放送テレビ」9月には創立21周年記念大会をNHKが取材、即日ニュース番組で放映されるなど、マスコミを通じて大阪府断酒会が広く世間に知られるようになった。

このような情勢の中で昭和61年12月に第26回全国(大阪)大会の準備委員長に濱野 良造 副会長(当時)が選任され、翌昭和62年2月16日に準備会が発足し、大会へのスタートが切られた。

全国大会は会員数の増加とともに年々参加者が増えてきた。これまでの大会を上回る人数を想定し、1万人を収容できる大阪城ホールを確保した。そしてこれを参加者で埋め尽くそうと一致団結して準備にあたった。第10回全国(大阪)大会は広島大会の翌年で、偶然にもこの第26回全国大会も前年が広島大会であった。この広島大会では6,000人も参加者があったが、より以上の大会にしようと会員の心意気は盛んに燃え上がった。

平成元年10月21日、大会前日のアルコール問題関係者会議、会長会、交歓会、家族の集い、虹の会、アメシストの集いなどに2,100余名が参加し、かつてない盛んな交流が行われ、大会当日の22日には7,000名を越す会員、家族が全国から参集した。念願の、より多くの仲間が集う、より実り豊かな大会を達成するこ

とができた。この参加者数は今日に至るまで超えられることのない記録である。

また大会前日のアルコール問題関係者会議のテーマとして、初めて子供の問題が取り上げられた。

これは、当時、「飲んでいるときはもちろんのこと、たとえやめていても、いつ飲まれるか、飲まれたらまた以前の悲惨な生活に戻りたくないかとの怯えから、解放されることのない家族、とりわけ子供たちの気持ちまで理解しようとしなない」飲酒当時と何ら変わらず、姿を変えた形で周囲を自らの犠牲者として憚らない「酒をやめることが先決で、やめるためには家族のことを顧みることをしない」人たちが一部にあたりして、家族や親子の隔絶はなかなか拭いきれず、この問題がクローズアップされてきた。このことに焦点をあてて、アルコール問題関係者会議（テーマ・酒害と子供）を開き、その記録を編集して、平成2年9月に出版した「酒害と子供」は大きな反響を呼び、その後の断酒会活動に一石を投じた。

◆指針と規範

平成3年3月、全断連から「指針と規範」が発行された。これは第26回全国（大阪）大会の顧問会議で「全断連にはAAの12ステップのような理論と実践における指針になるものがない。今後の活動を強化するためには、過去の経験を理論化し、規範として示すことのできるようなものがあって然るべき時期にきていると思われる」との意見に基づいて、その作成に全断連常任理事社団法人高知県断酒会新生会小林哲夫会長（当時）が選ばれて編集にあたり、慎重な討議を繰り返し作業が進められ、その製本出版を大阪府断酒会が引き請けた。この教本を基に全国的に勉強会が開かれ、大阪でも平成3年11月に役員勉強会を行い活動の糧とした。



◆大阪府断酒会の拡大と細分化

平成3年9月1日、大阪中央公会堂で創立25周年記念大会が開催された。この間全国的に断酒会が増え、大会の回数も増えてくるにつれて、相互の日程に

重複することが度重なるようになってきた。

平成4年5月に大阪府断酒会は府下を7つの地区に分ける協議会制を導入、大阪市を細分化し、7協議会54断酒会になり、大会の日程の調整をつけることが急務となってきた。論議と調整を重ねた結果、「節目」の年に大会を開催することを原則に、①大阪府断酒会は毎年記念大会を開く。ただし、節目に当たらない年は規模を縮小する。②地域断酒会は、発足から5年までは毎年、以後は7年・10年、その後は5年ごとに開催する、との確認を行った。

平成9年5月、大阪府断酒会施行細則を改定し、協議会の呼称を連合会に改定した。

◆第38回全国（大阪）大会



平成元年の第26回全国（大阪）大会後、大阪府断酒会理事会で諮り、次の大阪大会を21世紀初頭（西暦2001年）にしよと決定し、翌年、全断連理事会の席上で開催の立候補を申し入れ、決定された。

運営委員長に大阪府断酒会会長堅田英雄氏（当時）が選任され開催へ向けて取り組み、平成13年10月14日、門真市なみはやドームで第38回全国（大阪）大会が開催された。

大会テーマを「21世紀の門出!!大阪発」とし、5,218名（大阪府断酒会1,209名）の参加があった。21世紀の始まりの年にふさわしい活気ある全国大会となった。

また同年は大阪府断酒会35周年記念大会に当たる年であったが、全国大会との兼ね合いもあり、記念大会は開催せず、翌平成14年9月29日大阪府断酒会36周年記念大会にて断酒表彰など必要行事は合同で行った。

◆アルコール作業所の設立

断酒継続者の増加に伴い新たな問題が生じてきた。断酒は継続しているものの、社会参加や社会復帰への道のりは厳しいものがあった。また、単身者の断酒生活上での生き甲斐や孤独の問題も大きくなってきた。平成7年1月17日の阪神・淡路大震災後には、孤独とアルコールとの問題もさらに顕在化してきた。そこで、より一層の社会参加の足掛かり、日中活動の場としてアルコール依存症者の為の作業所の設立の必要性が高まってきた。

平成9年9月、アルコール作業所準備会が結成され、翌々年平成11年5月には小規模作業所としてリカバリハウスいちごが大阪市東住吉区に開設された。平成14年1月に特定非営利活動法人いちごの会を設立し、現在では矢田、長居、阿倍野、尼崎などに事業を展開、アルコール依存症者の日中活動の場として、また人的交流、社会参加の場として様々な回復モデルを提供している。

堺市でも平成9年に酒害者当事者によってフェニックス会が結成され、平成16年に入りフェニックス会によって酒害者共同作業所フェニックス・リングが開所した。平成17年に特定非営利活動法人フェニックス会となり、仲間が集まりお酒を飲まない時間を共に過ごすことを目的とし、堺市以南の地域を中心に事業所を展開している。

現在も、大阪府内でさらにアルコール作業所の設立の輪が広まり続けている。

◆今道裕之先生・小杉好弘先生の急逝

平成18年2月14日に今道裕之先生が、平成22年8月13日に小杉好弘先生が心筋梗塞で、共に享年73歳で相次いで亡くなられた。

今道先生は昭和44年11月、浜寺病院の断酒例会を見学され、その後、大阪断酒会の協力病院として新阿武山病院内で院内例会を開始された。昭和52年には藍野病院アルコール病棟を独立させ藍陵園病院を開設、院長として赴任なされた。その後も新阿武山病院理事長などを務められ、大阪府断酒会顧問



として大阪府断酒会の発展にご尽力いただいた。

小杉先生は初代会長二見泰之助氏とともに断酒会の草創期よりご尽力された先生であり、大阪府断酒会顧問であった。特に単身者のアルコール中毒者の問題に取り組み、アルコール問題研究所の開設に携わり、昭和56年には全国で初めてのアルコール専門通院医療機関である小杉クリニック本院を天王寺に開設された。



お二人の急逝は断酒会にとっては早すぎる死であった。

◆断酒宣言の日の制定

平成20年、断酒宣言の日が11月10日に制定された。

この日は昭和38年11月10日に「全日本断酒連盟」結成大会を開催した日であり同月日を「断酒宣言の日」とした。

全断連結成当初からの目標である、アルコールのもたらす社会的害悪の防止を社会に訴えていくなどの公共的な事業の一環とし、平成20年11月10日より「飲酒運転根絶」をテーマに取り上げ全国一斉キャンペーンを行っている。

大阪府断酒会では断酒宣言の日に合わせて大阪府中央区高島屋前にてポケットティッシュ、チラシの配布を行っている。各連合会もそれぞれの地域において配布を行い、参加者も年々増え、会員の地域貢献活動の一環としてもおおいに役立っている。

◆自殺対策事業

国の自殺対策基本法を受け、断酒会としてアルコール依存症者の自殺対策事業に取り組んでいる。

大阪府の補助事業として平成21年度より事業を行った。以下に箇条書きにて記す。

- ・準備委員会を設置し事業の立案、検討した。
- ・地域断酒会一日勉強会でアルコール依存症者の自殺問題についての講演等を行った。
- ・啓発冊子『知っていますか？自殺のこと』、『自殺を防ごう、悩みの相談機関一覧』、『これからのとき、大切な方を亡くしたあなたへ』を発行、配布した。

- ・自殺念慮に関わるアンケート調査を全会員に実施し、報告書の作成、発行した。
- ・自殺問題勉強会を各連合会で実施した。
- ・専門家を講師に招き、電話相談講習会を実施した。
- ・事務所でこころの悩みに関わる電話相談を実施した。
- ・自殺に関わる体験手記集『いきいそがずに』を作成、発行した。
- ・対面相談事業を 3 モデル地域で実施した。
- ・市民啓発講演を 3 モデル地域で実施した。
- ・自殺予防啓発の学習会 3 モデル地域で実施した。
- ・若年層向け相談会を 3 モデル地域で実施した。

◆アルコール健康障害対策基本法

平成 22 年 5 月 WHO が第 63 回総会で「アルコールの有害な使用を低減するための世界戦略」を決議されたことをきっかけに、同年 7 月、日本アルコール関連問題学会が基本法制定推進を決議、ASK と全日本断酒連盟に協力を要請した。9 月には ASK と全断連が事務局をつとめる日本アルコール問題連絡協議会（ア連協）が基本法推進を決議、10 月に日本アルコール・薬物医学会と日本アルコール精神医学会が基本法推進を決議し、3 学会合同構想委員会へとつながった。平成 23 年 1 月、3 学会が「簡易版アルコール白書」を発行し、同年 3 月、3 学会合同構想委員会が発足した。

平成 25 年 9 月 1 日「基本法制定を願う集い in 大阪」を大阪府断酒会 47 周年記念大会と同日開催し、制定への機運を盛り上げた。

平成 25 年 12 月 7 日 0 時 25 分参議院本会議において全会一致で可決、「アルコール健康障害対策基本法」が成立し、平成 26 年 6 月に施行された。

アルコール健康障害対策基本法は「酒類が国民の生活に豊かさや潤いを与えるものであるとともに、酒類に関する伝統と文化が国民の生活に深く浸透している一方で、不適切な飲酒はアルコール健康障害の原因となり、アルコール健康障害は、本人の健康の問題で



あるのみならず、その家族への深刻な影響や重大な社会問題を生じさせる危険性が高い」ことを基本認識とし、「アルコール健康障害の発生、進行及び再発の各段階に応じた防止対策を適切に実施するとともに、日常生活および社会生活を円滑に営むことができるように支援」「飲酒運転、暴力、虐待、自殺等の問題に関する施策との有機的な連携が図られるよう、必要な配慮」を基本理念として制定された。

基本法制定を受けて大阪府断酒会では内閣府の呼びかけに応じ、平成 26 年 11 月 10 日、エル・大阪に於いて「アルコール関連問題啓発フォーラム」に参加した。同日午前中には大阪市中之島、大阪城公園の二カ所よりアルコール関連問題啓発パレードを行った。

平成 28 年 2 月～5 月にかけて対策推進室により基本計画が策定され、平成 28 年 5 月 31 日、基本法に基づき「アルコール健康障害対策推進基本計画」が閣議決定された。



◆社団法人から一般社団法人への移行

平成 20 年 12 月 1 日に公益法人制度改革に関する法律が施行され、社団法人は公益社団法人または一般社団法人への移行が義務付けられた。

断酒会は公益目的事業を主としており、当初は公益社団法人への移行を計画したが、地域断酒会の活動への制約を懸念し、また会費収入を主として事業を行っている事に鑑み、より独自の事業展開が望める一般社団法人への移行を目指すこととなった。

平成 25 年 10 月の臨時総会で一般社団法人への移行申請を決議した。

大阪府の認可を受け、平成 25 年 4 月 1 日の一般社団法人に移行した。

移行後は継続事業として公益目的事業を行い、この事業の支出超過分に移行前の資産を充当している。

思い出の記

私の断酒

二代目会長 石野 健夫 (故人)

「なにわ」創刊号 (昭和 43 年 8 月 1 日発行) より抜粋

まず小杉先生に感謝します。

私の断酒は一年七ヶ月近くになりませんが、身近で旨そうに一杯呑まれると矢張りアルコールへの郷愁捨て難く、雰囲気は眩しく、断酒には卒業なしと痛感されます。



酒の呑み始めは三十年前ですが、常習呑み助の仲間入りは、二十年前勤務地が山形県の庄内で、米産地であり、又当時ドブロクの本場でした。土木工事の現場監督をしていましたので、付き合い上呑む機会に恵まれ、その中寒中積雪中すめられるまま朝昼晩と調子に乗ったのが始まり。以来十八年間大失敗しては断酒、節酒、そのうち深酒と、悪循環で家庭は言うに及ばず、職場もうまく行く筈はありません。

昭和四十一年三月、お先真つ暗と妻に口説かれ、ついに市大病院に行き、強度のアル中と診断されましたが、どうしても自認できず、自力で頑張りましたが、一ヶ月目には元通りとなり、おまけに深酒の周期が短くなる一方、妻に矢張り入院と八月再びしぶしぶ市大病院の門をくぐり、初めて浜寺病院における小杉先生指導の断酒グループの存在を知り、先生への紹介状を頂きながら、それでも酒への執着断ち切れず、生まれ変わった気持ちで節酒すると妻をごまかし、その中また終日酒なしではおられぬ二か月が経きました。

会社は倒産寸前、家計も火の車、会社と家からの挟み撃ち、いや何とか苦況切り抜けるべく頑張る虚勢は張ったものの、結局深酒にしびれて、焦燥逃避に走るより外ありませんでした。

その中、会社は倒産、妻の実家からは入院断酒しないと家族を引き取ると申し出あり、友人達には遂に見放され、愈々八方塞がり、背水の陣を敷かねばならぬと意を決し、忘れもしない昭和四十一年十月十二日、妻は勤めていたので、四件の酒屋で立ち呑みし、悲壮な気持ちで浜寺病院に単独入院し、酔いが醒め、どえらい所に来たものと後悔しましたが、後の祭り。

一週間目に小杉先生に初めて診断を受け、アル中を治すには断酒グループに入るより外になく、目下創立準備中、必

ず入会をとすすめられました。又同じく入院中のアル中の方より A・A の十二の階梯を頂きましたので、十日間閑にまかせ熟読玩味し、やっと自分がアル中だと自覚し始めました。

まず、自分は完全に酒に敗北した事、呑み助時代の己の行為は一切ピント外れである事をどうやら認めました。それでは、院内では何をすべきかを考え、先ず節度ある生活に入るべきだと手近に早朝の冷水摩擦と柔軟体操、就寝前その日の日誌を書く。これを今日まで実行しております。そして過去の失敗を謙虚に反省、そして酒無しの活気ある人生を如何にスタートすべきかを考えました。

十月下旬院内の大阪断酒会の例会に初出席し、先輩より自分と同じ様な過去から立ち直られた体験談、激励により大いに得る所があり、断酒の決意を固くしました。

十一月十二日、一ヶ月の入院生活に別れを告げ、二度と足踏みする所ではないと心に誓いました。さて、退院はしたものの完全失業、早速就職運動、先輩友人には呑み助の悪名響き渡っているのでは、惑いましたが勇を鼓して断酒会へ入会していることを説明し、どうにか十二月一日より現在の会社に就職決定。以来勤務の都合で別居しておりますので、酒の誘惑はしばしばありますが、毎週の例会出席により、お陰様にて切り抜けております。

職業が建設会社の土木技師なので、どうしても酒宴との縁が切れませんが、杯またはコップをやむなく手にした時は、必ずこの一杯は昔のお前への逆戻りだと言いつつ聞かせ、又同席の人達には務めて断酒会員であることを説明し、納得してもらっておりますが、神ならぬ身故、酒席に待るといやな気持ちになりますから、早く切り上げるとか、やむを得ざる折以外は遠慮しております。自宅には一週間ごと、例会の日に帰っておりますが、昔の陰気は吹き飛んでしまいました。断酒六ヶ月目より体調は快適、又会社からは信用されて来たのか処遇が最近入社時とすっかり変わりました。常に自分は酒に完全敗北した事の自認、イエスマンではどうしても腹の中に一物残るので、必ず納得づくの意見を述べるようにして気持ちの負担をなくしております。思いつめずに解決の糸口を見つめる様にしております。そして生活にリズムを持たせる様にしております。最後に「断酒には卒業なし」の気構えて、一日一日を謙虚に断酒の日を積み重ねていく所存であります。

主人の酒

二代目会長夫人 石野 淑子

「なにわ」2号 昭和43年11月1日発行より抜粋

おとうちやんと
さんぽにいつた
さかやの前になると
「キャンデー買ってやろう。」
と、おとうちやんがいうた。
ぼくが
「おさけのんだらあかんよ。」
と、手をひつぱつたのに
おとうちやんは
おさけのんでしもうた。
いえにかえつたら
おかあちやんに
「パチン」とたたかれた。

これは四年前、我が家の暗黒時代に、当時二年生の末つ子長男がうたつた詩(?)である。授業参観の後の懇談会で、先生は次々と子供達の詩を読みあげられた後、「子供は素直にありのままに詩を書くので、家庭の様子が鏡のように詩にうつります。たまには頭に来るようなことも書くでしょうがどうぞ叱らないでやって下さい。」と言われた。その頭にくるような詩が、うちの坊主のものとは、私は恥づかしさの余り顔をあげることも出来なかつた。酒を飲んだくらいで子供を叩くとは、何と愚かな母親なんだろう、と先生は思われたにちがいない。だが、その頃の私は理性も何も失つた情けない母親であつた。

その頃主人は、深酒をすると必ず会社を休むのが常であつた。休んでは飲む、翌日又ふつか酔い、又飲むの繰り返しで、会社へ出勤する為にはどうしても酒を絶つ必要があつた。何としてでも飲まさなければ翌日から正常になれる。一日断酒のお守りをするのが、私の勤めなのだと思つていた一寸の隙に、忍者の如くに消えて了つた。「お父ちゃん散歩だからついて行きなさい。飲んだらだめつて言うのよ。」「うん。」と勢いよく父を追つかけて行つたもののなかなかに帰つて来ない。ああ、又飲んでいるのだ、明日も出勤出来ない……

いらいらしているところへ二人の御帰還、にやけた主人の顔、とたんに子供の頬に平手打が走つたと言うわけである。その頃の我が家はそういう日の連続であつた。いえ、そんなことは序の口で苦労話は数え切れない。家庭教育もしつけもあつたものでなく、主人が酒を飲み出すと只そのことだけで私の頭は一ぱいになつて了う。

父親は何の権威も親近感もないアル中、母親はヒステリー、憐れなのは子供達であつた。「俺は一生酒は止めないぞ。」という主人に絶望し、次第に、本気で離婚を考えるようになった。だが、神仏は私達一家を見殺しにはなさらなかつた。断酒会結成の時期にタイミングよく小杉先生に拾われたからである。先生の御熱意と会員の皆様の励ましを頂いて、今日迄断酒が続けられたことは驚異という外はない。私は主人にこれだけの意思があろうとは思つても見なかつた。意志薄弱で甘えん坊で、お人好しでと今までさんざんこきおろして来た言葉はだんだんに取り下げなくてはならない。何をしても三日坊主で終つていた主人が、断酒と同時にやり出した冷水摩擦と体操、メモ日記がずっと続いている。たまの日曜日、ゆつくり寝坊するという私を尻目にどンドン起きてオイチニ三四……さては「もしも断酒会の石野ですが……」あちらこちらへ電話、或時は挫折しそうな会員を訪ねて激励に出かける。もうちよつと説得力があつたらなあと思うのだが、本人は一向気にもせず断酒の喜びをわかつて貰おうと懸命である。そして我が家は、波風一つたたず、現場から夜、電話があると「パパはママの声が聞きたいつて。」と言つては娘達はキャッキョウ笑い合う。思つても見なかつた幸福一悪夢のような二十五年余を経てようやく辿りついたしあわせである。

然し、ふつと飲みたいだろうな、あんなに好きな酒だつたのにとしみじみ可愛そうに思う時がある。きつと主人も会員の方々達もこの思いは同じであろう。その「ふつと」が恐ろしい。どうぞ私達家族の貴方に寄せる尊敬と信頼の情を裏切らないでー。

第 10 回全国大会の思い出

三代目会長 濱野良造 (故人)

「大阪府断酒会 30 年」平成 10 年 4 月 20 日発行より抜粋

私が大阪断酒会に入会したのは昭和 44 年 9 月 43 才の時、会員数も 100 名足らず、支部も大阪市内にいくつかあるだけでしたが、皆さん 11 月に開く三周年大会にむけて意気盛んな頃でした。翌年には人口の多い堺市には活動の拠点が必要であると会員わずか 2 名であったが、堺支部が新設され、堺支部長として私の自宅で例会を開いていた。



時あたかも、高度成長、万博景気で世間は沸きに沸いていたが、私には関係のないことで、ひたすら例会通いで余念がない毎日でした。その間、堺支部も会員が徐々に増えてきて、保健所や市に対して断酒会を理解してもらうために働きかけたり、私の家では手狭になった例会場探しなどで走り回っていた。その関わりの中から、48 年に開催される全国(大阪)大会に保健婦さんや行政の担当者の方たちに出席してもらえよう話を取り付けることができた。

昭和 48 年 11 月 25 日は、朝早くからそわそわと落ちつきがなかった。それというのも今日が大会のメインである本大会、落ちつけという方が無理というものだ。前年 11 月に広島で開催された大会に大阪から 30 数名が参加して、全国各地の断酒会から集まった二千名を超す仲間の大きな力に圧倒と感激を覚え、ましてやこの大会で「来年は大阪であいましょう」とアピールされ、大阪から参加した仲間が「よし！来年はやるぞ！」と帰ってきたことや、もともと第 10 回は北陸地方で開催することになっていたのが、事情でできなくなり、急きよ大阪に決まったことや、またその準備に追われてきたことが、脳裏にまざまざと思い出されて、ようやく本大会に漕ぎ着けた安心と不安が入り混ざった複雑な気持ちであった。

大会テーマ「豊かな心」の合言葉のもと、会場(大

阪市東淀川体育館で開催)は、二千五百名をこえる盛大な大会となり、大成功であった。また前日には、広島大会に続いて「会長会」が行われ、活動状況や様々な情報の話し合いがあり、次のステップへの足掛かりを得ることができた。

思い返せば、当時の大阪断酒会の態勢ではかなりきつい事業であった。それまでも全断連から、万国博覧会(昭和 45 年 3 月 14 日開幕、通称万博)開催地の大阪でとの話もあったが、まだ会としても力不足で時期尚早と先送りされていた。北陸での全国大会開催が不可能となって、大阪に順番が廻ってきたのも、そのような背景があったからでもあった。

昭和 47 年当時は支部も 13 ヶ所を数えるようになっていた。ようやく府下の北方面にいくつか支部ができてきた時期であり、会員も 500 名位になっていたが、しかし実際に例会に出ているのは 200 名位だったと思う。それでも 45 年から 47 年にかけては、アルコール問題研究所が開設され(46 年)、藍野病院や泉州病院にアルコール専門病棟ができてきた(47 年)。また、本部事務局を飛田好一さんが担当し(45 年)、保健所現業のケースワーカーへの働きかけや、近畿ブロックの結成(47 年)、など活動を内に外にと活発に活動していた。毎年入会者も 100 名を超す、言わば活動期を迎えた時期でもあった。

そんな中で、第十回全国大会を 48 年に大阪で開くことになった。それまでも全国大会には石野健夫会長(当時)ら何人かが参加しているとはいえ、断酒歴 5 年以上の人といえば石野会長と山口安夫副会長(47 年当時)の二人しかなく、なにぶん初めてのことで、今まで開催された全国大会の資料をもとに、会場をどこにするか、費用はどう調達するか、役員それぞれが、会社務めや今までの経験・活動などを生かし、役割を分担して、プランニングや予算作りにと、何回も何回も検討され、48 年 8 月 5 日の役員会で、全国大会の準備委員が選ばれて、委員長に永峰半太郎副会長(48 年当時)が決まって本格的な準備に入った。私も準備委員として加わり、飛田事務局長(当時)と共に総務を担当し、主として企画立案にたずさわった。役割についても、どんな役割を決めればよいのか、見落としがないかなど

細心の注意を払わなければならず、随分気を遣ったものでした。

一番難儀したのは当日の案内係を誰がするかであった。なにしろ当時は「断酒会」そのものが世間に知られていない、「断酒会」や「アルコール問題」がテレビで放映されたり新聞で話題として取り上げられるようになってはきていたが、中には「アル中」という興味本位なものもあったりして、「断酒会イコールアル中の集まり」的な目で見られていた時代、ましてやアル中本人が「断酒会」の旗を持って「私はアル中でござい」などと人通りの多い駅前や道路、人目に立つ所には、誰もが二の足を踏むのが当たり前で、スツタモンダのあげく、尼崎支部長をしていた八木順一さんが「よし、私がやろう」と引き受けてくれ、奥さんと一緒に大きな「大阪断酒会」の旗を持って新大阪駅改札口に立ってくれた。尼崎支部や他にも茨木支部、東淀川支部からも「八木さんがやるなら私もやりましょう」と案内をかって出してくれ、その勇気にいまさらながら頭の下がる思いがする。また、大会後の弁当がらの後始末に体育館の焼却炉が小さくてはかどらず、随分時間がかかったり、いろいろ混乱もあったが、この大会を乗り切ったことが、「断酒会活動」の自信となり、活動家が増えていった。翌年の49年にはイッキに6支部が新設され、府下に拠点ができるようになった。

まさに「大阪断酒会」飛躍の年として、今になっても忘れることのできない懐かしい思い出である。既に石野さん、飛田さんは故人となられ、三十周年にあたって、ともに喜びを分かち合えないのが残念でならない。

私の選んだ人

三代目会長夫人 濱野 喜美江

「なにわ」8号昭和45年8月1日発行より抜粋

昨年の9月7日入会前夜の事です。

「明日限り酒とも今生のお別れ、今宵はとことん迄飲むぞ」と、日頃は連れていった事もない酒場へ私を連れてゆき、恐しい程の飲み方でした。あの日が今では最後の酒となって十ヵ月余、荒廃としていた我が家も台風一過の後の日本晴の様に、和やかな落ち着いた今日この頃でございます。

入会以来きびしい態度でやめ続ける主人。時には夢の中で飲酒し「シマッタ」と、油汗をかいて飛起き、ある時は接待に出された紅茶の中のウイスキーを知らずに口にし、一瞬吐き出しヤレヤレ紅茶といえども油断大敵と細心の注意を払っている様です。

断酒は至難の業不可能を可能とし、成せば成るを地でゆく主人、私の大好物、甘い菓子類を断つとなったら、果たして出来るか、どうか……思いくらべ、あのたくましい精神力は本当に偉いと思います。そして私の選んだ人は強かったと心ひそかに喜びにひたって居ります。

あの当時の私は冷静さを失い自分を見つめる事を忘れていました。そんな状態ですから夫婦意思の疎通は全くなく疲れきった精神で生きている事自体が精一杯でした。

今は仕事と断酒会に生甲斐を感じ張り切っている主人を信頼出来るしあわせ。

二人で話し合っている時間が私にとって何よりの楽しみでございます。

社会は急テンポで進んで居りその時流に乗って生き、いそがない様出来るだけ心にゆとりを持って自分を深く見つめ反省しながら良き協力者としての生活を送っていきたいと思います。現在の主人があるのも皆様のお力があればこそです。本当に有難うございます。

歴代会長に聞く



四代目会長 菅原 春雄

■入院されていた頃のことをお聞かせ下さい。

水間病院、泉州病院、藍野病院、浜寺病院、金岡中央病院などに入院しました。泉州病院では、和気先生に担がれて保護室に入れられたこともあります。そして、正月に院内で酒を飲んで出来上がって寝ていたら、和気先生が来て見つかってしまいました。そのことはいまだに言われます。小杉先生と知り合ったのは、大阪府断酒会ができる前でした。小杉先生も私も28歳で、浜寺病院に入院していた時のことです。その時に、大きな禁断症状がでて、当直をしていたのが小杉先生でした。大きな痙攣^{けいれんほっさ}発作で、このままでは死んでしまう。近くの高石病院に救急車で搬送し、全身麻酔を打ったのです。しかし、痙攣は止まりませんでした。そして、意識が戻ったのは浜寺病院に戻されてからでした。前歯が折れていました。その時、二見さんも一緒に入院していました。二見さんのお兄さんはNHKのアナウンサーで、よくテレビにでていました。藍野病院に入院していた時、噂に聞いた病院ゴロなので放り出そうと看護師長が外泊許可をだすのですが、飲まないで帰ってきたのでびっくりしていました。

■菅原さんが、断酒会に入会された頃のことをお聞かせ下さい。

最初に、私がお断酒会の例会に行ったのは、超願寺というお寺でした。これは、古い人は皆さん知っています。そこでいつも、月1回の本部例会をやっていたのです。その当時、支部は3つか4つしか無かったと思います。そこで一生忘れられないことがありました。水間病院で一緒に入院していた本田さんと、超願寺の本部例会で再会したのです。入院したら絶対に出ることができない病院だったからです。奇跡やと思いました。

全国大会に船で行くことができました。なかには、

船の中で博打をする奴もいるのです。堺の断酒会なんか旗まで吊っている船の中で。私は言いに行きました。『お前こどこや、今から何処へ行く。止め言うたら止めんかい！』皆それで止めました。しかし、勝っている者はいいが、負けている者には凄く恨まれました。

■『断酒人の墓』について教えてください。

目の前で死んでいく人を何人も見ました。そして、玉川さんの死を見たのが『断酒人の墓』を作るヒントになったのです。普通でしたら無縁仏です。あの人が最初で、アイデアを考えさせてくれたのです。よく考えると、『断酒人の墓』は、全国にひとつしかありません。今、30人くらいが入っていて、久米さんが一生懸命お世話をしてくれています。今道先生も寄付してくださり、為永病院も10万円寄付してくれました。当時は、皆さん理解がありました。今でしたら無理なことです。あの時は、皆さん必死やったからね、燃えていました。

■連合会の組織が変わった頃のことをお聞かせ下さい。

大阪市断酒連合会の舛田さんが、一区一断酒会を打ち出したのです。最初は、色々な意見がでました。ひとつの区にひとつの断酒会というのは無理じゃないかと。大阪市の区には、池田市の人口を上回るころもある。最初は、四つに分離する計画でした。しかし、舛田さんが押し通したのです。その時に、連絡を密にするために、連合会を作って連絡を密にしようということになったのです。それで、私はよかったと思います。しかし、難しいこともあります。上手くいくところと上手くいかないところがありました。

話は違いますが、和気先生に『なんで家族がお茶を沸かしにくるんや？そのために来てるんか？』と言われたことがあります。なるほどと思いました。ですから、豊中支部の時に、『これ止めよう』と先頭切りました。和気先生が、家族もお茶を沸かさなくていいと言ってくれたことがあったのです。

■体験談で『断酒会なめんなよ』と、ご自身に大きな声で言われますが。

あれはね、普段でも声が大きい、人間は力が入る

と声がさらに大きくなります。その時、体が燃えているのです。だから、そういう言葉の表現になってしまうのです。

私もね、ほんま止めているのが奇跡だと感じています。絶対に止めることができないと思っていました。ですから、ええ加減な生き方をしていたらあかんです。やっぱり、飲めなくなっていく自分を作り上げていく。酒を止めるのではなく、飲めなくなっていく自分をね。

■ 今の断酒会についてご意見をお願いします。

自分さえ止めたらいいと言う人が多くなりました。自分さえ止めることができればいいと、そういう雰囲気非常に強いように感じます。仲間には、電話だけでもほっとする人もいます。やっぱり、何かのきっかけを作ってあげるのが、我々がすべきことですね。見て見ぬふりをするよりも、何か手助けをしてあげる。電話一本でも、仲間にはほっとするのです。



五代目会長 堅田 英雄

■ 堅田さんが、入会された頃のことをお聞かせください。

私は、昭和 51 年 4 月に浜寺病院に入院してね。そこで断酒会を知って、入院中に入会したのです。酒は 16 歳くらいから飲みだして、36 歳くらいまで飲んで

いました。そして、堺市の病院を転々としていました。もう疲れてしんどい毎日だったので、ちょうど、森ノ宮に新しく成人病センターができたので、一週間ほど人間ドックに入りました。しかし、どこも悪くない。これはいよいよガンかなと思いました。半年くらいたったころに病院からハガキがきて、その後何か症状ができましたかというものでした。主治医の北川先生(当時、堺市医師会の副会長)に相談したのです。私も自分の病名を薄ら分かっていましたが、『病名なんでしょるか?』て、こうしてハガキきていますと言いました。先生は、『書いてもええんか?』と言われ、私も分からんから書いてくれと言いました。『慢性アルコール中毒症』と。自分でもアル中と思っていましたが、そういうことでした。先生とは、後々堺市断酒会の顧問になってもらったりと付き合いが深くなりました。私が断酒会に入った時は、堺支部の一角所しかなかった。私は運が良く、宿院と金岡の保健所が例会場を貸し出すことが始まり、退院した時点で便利のよい宿院ができたのです。本部例会は、大阪市内の会館で開催されています。畳敷き 100 帖くらいあったと思います。そこで、月の始めに断酒表彰を大阪府全体でやっていました。その時は、石野さんが会長として頑張っておられました。

堺以外も回らなければと思い、大阪府断酒会で一番偉い人がやってる会場へ行こうと思いました。そこへ行ったら、あんまり集まりが良くなく、昔のダルマというコークスの石炭から炊いたストーブがありまして、皆が集まるまでここに集まって話しようとなりました。私が体験談を話すのが苦手だと言いますと、『わしと二人だけやったらこんだけしゃべるやないか。例会では、わしの顔見て二人で話していると思うて話せ』と言ってくれました。石野さんは穏やかな人で、怒ったような顔を見たことはありません。

■ いづろ堺断酒会の会長をされましたか?

昭和 60 年に、濱野さんが大阪府断酒会の仕事が忙しくなりました。そこで、私に堺断酒会の次期会長をやりなさいということになったのです。

堺市長の依頼で、大阪刑務所を訪問しての酒害研修会(年 4 回)を始めました。堺断酒会創立 15 周年

記念大会では、熊野小学校の講堂を借りて開催しました。古い人達が珍しがって懐かしがってくれましたことが良い思い出です。

平成4年11月には地域保健活動に貢献した団体として、大阪府医師会の会長賞をいただいています。北川先生の推薦だと思えます。祝賀会がありました。酒を飲まないで、『先生、私帰らせてもらいますわ』と言って帰る時に、『断酒会さんおめでとうさん、堅田さんおめでとうさん』と言う声がありました。どんな医者やと思いましたが、各保健所の所長でした。保健所所長も医者ですので、医師会に来ていたのです。

■大阪府断酒会会長の8年間に、ご苦勞があったと思えますが。

平成11年5月の定時総会で、私が大阪府断酒会の会長となりました。ほとんど、事務局とか皆にやってもらって、私が直接何かこれと言ってはありません。問題があると、『今度のことは、会長に行ってもらわなアカン』ということがありました。『あんな、わしが行ってもなんの役にもたたんよ』と。会長が行くと、相手も課長や部長が出てくる、普通はそこまで出てこないと言われました。そういう時には、連れて行ってもらいました。まあ、名前だけです。皆さんよくやってくれました。頭が下がります。

一番最初に取り掛かったのは、近畿ブロック断酒学校です。皆さんの協力のお蔭で、第1回から第8回まで運営することが出来ました。

平成13年に第38回の全国大会をなみはやドームで開催しました。会場探しや駐車場など、大阪府議会議員や地元の方がよく支えてくれました。ちょうど隣が道路公団の用地だったので、どうかこうにか貸してもらえた。あれが良かったです。駅も終点で、降りたら直ぐやし。お金がない時期でした。講演の予算も無いので、『御三家に頼もうか、そしたら金いらんやないか』と。今道先生や小杉先生に頼みましたところ、『よっしゃ』という返事が返ってきました。当日、5万円ずつ持って行きましたが、受け取っては頂けませんでした。会場も、精神障害者割引が適用されて、半額になりました。助かりました。

その後、そろそろ任期も終わりでしたが、あと

40周年記念大会があるからそれまでやれとなり、それまでさせてもらいました。



六代目会長 野村 貞夫

■野村さんが入会された頃のことをお聞かせください。

昭和56年4月に、まだ大阪府断酒会とかなにも分かりもせんと、堺断酒会鳳支部に40歳で入会しました。当時は支部が、鳳と宿院と金岡と泉北でした。その後、私は平成2年に高石市断酒会に変わっています。

鳳支部では、副支部長を直ぐにさせてもらいました。支部長は大沢さんで、豆腐屋をされていました。豆腐屋というのは、チリンチリンと鳴らして夜夕方行商に行くのです。ですから、直ぐに副支部長をやりなさいと濱野会長に言われたのです。それからは、堺の事業部長をやり、ソフトボールとか年1回の旅行とかの斡旋(バスの用意など)を長いことやらせてもらいました。年の記憶が無いが、濱野会長に近畿ブロック協議会に連れていかれて、大阪府断酒会のソフトボール係をやらせてもらいました。

後先になるけど、平成元年に全国(大阪)大会を大阪城ホールで開催する時に、記念講演を漫才の西川きよしにやってもらったという話になりました。しかし、話が前に進みませんでした。難波利三さん(直木賞作家)がいましたので、私は勤め先の上司に相談して、連絡してもらいました。濱野会長と杉山さんの三人でご自宅を訪問し、全国大会での講演をお

願いました。その当時の全国大会準備会議は、役員や会員さんも喧嘩腰みたいな勢いでやっていました。その時の司会は、杉山さんと大阪市断の山岡さんです。大阪は大きな都市ですが、寝泊まりするホテルが少ない。和歌山には白浜、奈良、京都にはたくさんあるが、大阪には少ない。でも、大勢来て頂けた。諸先輩方が、各地の記念大会で呼びかけてくれたのです。その全国大会があったので、大阪府断酒会は役員改選を延ばしました。その時の会長は、堅田さんでした。

■濱野さんの思い出をお願いします。

濱野さんが、他の会の記念大会に行った時に聞いた話です。本人は一生懸命酒飲むけど、家族は断酒会に行こう断酒会に行こうと、奥さんが先に断酒会に通い始める。婿さんは、仕方なくついて行く。そして、だんだんふたりでいくようになる。しかし、娘が年ごろになってくると、嫁さんが、お父さん毎日断酒会行くと娘のことも考えてと言う。断酒会に行かさないうにする。そうすると、これ幸いで飲む、と言われていました。断酒会というのは深い、とても深いね。

■平成元年に全国大会で、その次の年に高石市断酒会を立ち上げたのですか。

あれは濱野会長の提案で、各市区（島本のみ町）に断酒会を設けました。その時点で高石市断酒会を立ち上げました。

■大阪府断酒会の会長をどのくらい務められましたか？

平成19年に私が会長になり、4年勤めました。70歳定年制が始まりましたので、理事も大幅に替わりました。事務局の河野さんや経理の小倉さんが替わりました。そこで、副会長には北川さん、高力さん、中畑さんをお願いしました。文化部長は柘田さんです。色々ありましたが、その時期に、大阪府断酒会の会費から、全断連に300円を納めるようになりました。それまでは、代議員が全断連の会費を払っていたのです。だんだんと、大阪府断酒会の運営が難しくなっていました。そして、協力病院に、協力金の再開をお願いした時期でもあります。

■その他、ご意見をお願いします。

断酒会の例会場を、簡単に閉めてはいけません。例会に来る人が無いから閉めてしまえと言いますが、簡単に閉めようと思えばいつでも閉められる。次に貸してくださいと言っても難しい。借りる時に、借りてくれた人が骨折って借りることができたのに、それを簡単にもういりませんとは。そんな訳にはいかないと思います。借りてくれた人のことを思ってみなさい。何遍も頭を下げて頼みに行ったものを。来ないからもういらん、また貸して。そんなことはできないと思います。

これからは、作業所と共存していかないといけない。共存するためには、どうやっていくかを皆で考えなければいかんと思います。



七代目会長 伊藤 聡

■伊藤さんが、入会された頃のことをお聞かせください。

ケースワーカーの指示で地元の断酒会に入りました。例会後、支部長さんに車で送っていただきましたが家の近くで降りますと言うと、家の前まで送っていくと言われました。あまり関わり合いになりたくはなかったのです。

大阪市内の会社に復職しましたが、とても緊張しました。昼間も終業後も酒を飲まずに家に帰ると言う生活は経験が無いので、仕事に行くようになると酒を飲まないと言った方がない、という気持ちにも捉われました。職場から真っ直ぐ例会場に逃げ込む毎日

でした。

全断連は会員数 2 万人と称していました。大阪では現在の地域断酒会がほぼ出揃っていました。会員の殆どは 40 代後半と 50 代で、60 代は数パーセントでした。それでも年寄りばかりに感じていましたが、今から思うと活気がありました。

当時に比べ、今の方が例会開催数も会場数も多く、各地の研修会も社会への啓発活動も盛んです。それにも拘わらず会員数が減り家族の参加も減り、断酒会の沈滞が問題となっています。活性化に向け出来る限りの方策を立て、実行する事が急務となっています。

■府断の運営に関わり、会長に就任された頃のことをお聞かせください。

以前に研修部員となった事もありましたが、地域断酒会の職務が疎かになる事を恐れ、1 年でやめました。思いもよらず野村会長の下、事務局長をさせて頂く事になりました。会長になってからもそうですが、仕事をしながらで会議には出席しても日々の業務はとても出来ず、前任者の河野さんがほぼ毎日来て事務所を守って下さっています。

会長就任時は 3 名の副会長も新しい方に交代しました。定年制があるので、役員は高年齢化していません。ただ 60 歳を過ぎても仕事をするのが常識の昨今では、役員の負担が重くなっている方もいるかと心配です。

平成 25 年 3 月に肝臓がんの手術をしました。幸い術後良好で、仕事にも復帰しましたが、その年末には職場を完全退職させてもらいました。お蔭で家族には迷惑を掛けませんが、日中でも断酒会の用事を無理なく出来るようになりました。

■法人移行、基本法成立と大きな展開がありました。

全断連の公益社団法人への移行計画を受け、大阪府断酒会も公益法人への移行を目指す事としました。私たちの活動はその殆どが公益目的と判断しているからです。従来大阪府断酒会の基盤を変えることなく公益法人に移行するには難しい点がありました。初めに戻って考えると、断酒会は会費収入に

よる活動が基本で、寄付金収入に活動を依存する法人ではないので、一般社団法人への移行手続きを進める事を理事会及び臨時総会で決議しました。一般法人の方が制約が少なく事業を行う余地がありますが、一般法人から公益法人への移行申請は体制が整い次第いつでも可能ですので、将来の判断に委ねる事になります。

三重の猪野先生の発信、行動が元になって、大きな力となり基本法が成立しました。大阪府の実情に即した、より有効な具体的施策ができ、実行に移される事を願っております。断酒会は当事者として大いに意見を述べ、出来る限り協力する事が必要となります。

断酒会が行っている例会や行事に行政機関へ可能な協力を要請する事になりますが、その他の多くの施策には当事者として積極的に協力する事となります。今まで以上の手間暇を掛けることとなります。

■第 61 回全国（大阪）大会に向けて今後の見通しをお聞かせください。

来年の第 54 回大会では、広島県と共催で行うべく協議中です。将来の全国大会が地方自治体との共催が基本となっていけば、内容・プログラムも従来とは変わってきます。この 1、2 年の成り行きをしっかりと見て、具体的な計画を立てて行く事になるでしょう。

8 年後ですが、思っているよりずっと早く時は経って行きます。放ったらかしにはしませんが、将来中心となって動いて下さる方々に任せざるを得ません。

私は常々、これだけの地域断酒会の数、会員数で、良くこちらからの要請に応じて戴けていると、感謝しています。役員は負託に応じてきっちりやらないといけませんが、会員一人一人の力の総和である断酒会の力を全面的に信頼しています。

波風や嵐があっても、断酒会はその力を失うことなく、酒害者の役に立ち続けると信じています。

報道をたどる

50 年史マスコミの報道をたどる

昭和 38 年 11 月、高知で全断連が結成され、断酒活動が全国的に広まっていくなかで、3 年後の昭和 41 年 11 月 5 日に近畿断酒連盟・大阪断酒会が結成された。同じ年昭和 41 年 11 月には、東京で第 3 回全国大会が開催されている。首都圏で初めて開かれる大会は、行政、医療関係だけでなく、マスコミ関係も大きな関心を寄せ、話題を提供した。

新聞やテレビを追うことにより、いろいろな時代背景がうかがえる。なぜ我々は、飲酒運転根絶キャンペーンをしているのだろうか。出張体験談をしている断酒会もあるだろう。今、私たちは、断酒しているだけでなく時代時代の要請に対応していかなければならない。この資料が、今後の断酒会活動の励みになることを期待し、以下にまとめた。

【収集した資料から抜粋】

昭和 43 年 (1968)

12 月 (読売新聞) 『アル中の夫を立ち直らせる「断酒会に夫婦で入会」酒害相談にも』

断酒に頑張っている西成支部長 木村芳治さん (当時) 夫婦の体験談が大きく掲載された。

『ハイ土曜日です!・お酒は怖い』(関西テレビ)

司会: 桂米朝・イーデスハンソン

大阪断酒会が始めて TV に出演した。

婦人部の活躍

10 月会長夫人を中心に婦人部が結成され、府や市関係当局へアル中対策の必要性を訴え、断酒会活動の理解を求め、また、新聞社やテレビなどマスコミ関係にはたらきかけ、断酒会を PR するなど積極的な活動をしていた。その活動の一環として、関西テレビにアプローチして放映が実現した。読売新聞の記事掲載と TV 出演により、近畿は勿論全国的にも反響を呼んで、問い合わせが殺到した。この報道によって大阪断酒会の存在と活動を広く知ってもらうようになった。

昭和 44 年 (1969)

3 月 (NHK テレビ) 『午後の話題』

大阪断酒会が取り上げられ、小杉先生や、石野会長 (当時) らが出演。酒害について、また、断酒会の実態と断酒会の必要性がテーマになった。

昭和 45 年 (1970)

10 月 (読売新聞)

『仲間、大阪断酒会「アルコール制圧!!』

会の生い立ちや家族同伴の例会での体験談を紹介して、酒害者の仲間にも強く呼びかけを行っている。



12 月 (関西テレビ)

山口・飛田・永峯・釈迦堂・上蘭等 (当時の役員) が夫妻で出演。断酒会の活動を説明し、酒害体験や断酒の喜びを語る。



昭和 43 年～45 年頃 (1968～1970)

専門医療機関がほとんどなかったなかで、全断連松村春繁会長 (当時) が全国を行脚し、各地域に断酒会の結成を呼びかけ、また既にできていた断酒会で酒をやめてゆく人達が出はじめてきたことで、「アル中は治らない」という従来のアルコール依存症者に対する偏見がくつがえされてきた。

新聞・テレビ等マスコミでもこのことを取り上げ報道することが多くなってきた。しかし、中には、アル中という興味本位の目で報道されていたことも事実である。これら新聞記事やテレビによるマスコミの報道は、近畿はもとより全国的にも反響を呼び、問い合わせが殺到した。また、入会する人も増えてきた。このような背景の中で、全国的に断酒会結成の機運が高まり、各地に断酒会ができていった。

昭和 46 年 (1971)

1 月 (大阪日日新聞)

『アル中患者に冷たい厚生省、研究費たった 30 万円』

大阪府下のアル中患者は約 4 万人、うち治療中の患者わずか 5 千人、あとはほとんど野放し状態で、警察沙汰が絶えない。このため厚生省でもやっとアル中研究班をスタートさせたが、研究費わずか 30 万円。

飛田事務局長 (当時) 談「週一回例会を開き、ざっ

くばらんに苦勞、失敗談を話し合っ、お互いに酒を忘れようと努力している。もうお役所はあてにしません。自分たちでやるしかありません」

7月(朝日新聞)

『不満のはげ口求め、アル中患者が激増あいらん地区』

釜ヶ崎対策と真剣に取り組まない行政のアルコール対策を批判。小杉先生談「中毒者はなまけものではなく、患者だ。それなのにこれまでは一時隔離しては放り出す、という安易な治療の繰り返しで、患者は症状が進む一方。治療したあと就職の世話をし、一般社会へ適応するような公的なアフターケアがなければ患者はなくなる」

昭和 47 年 (1972)

10月(朝日新聞)

『再び酒に戻らぬ「大阪断酒会 6 周年大会」』

酒は必ず断てる—慢性アルコール中毒に悩む人たちとその家族でつくっている全日本断酒連盟大阪断酒会の創立六周年記念大会が 15 日、大阪市農林会館で聞かれた。参加者は断酒会のメンバーをはじめ府下の精神病院長やアル中で入院中の人たち 350 人。断酒体験者の発表を聞きながら「ふたたびアルコールに戻るまい」と誓いあった。



大阪断酒会 6 周年大会で相互に体験を報告する会員たち (大阪立派区の大坂府農林会館で)

10月(サンケイ新聞)

『主婦が体験発表・こうして主人の断酒に成功酒のない素晴らしさしみじみ』

大阪農林会館で開催された大阪断酒会 6 周年大会で発表された主婦 3 名の体験談、アルコールのために一度はメチャメチャにされ、たて直しいいしれぬ苦勞をしてきた人たちばかり。その心にしみる話は、会場の人たちに共感と教訓を与えたようだ。

10月(朝日新聞)

『半年で 17 人が社会復帰果たす』

大阪市がこの 4 月に全国初のアルコール中毒患者のために社会復帰施設として設立した弘済院救護第二ホームで、生活指導や職業訓練などを受けてきっぱり断酒、定職につく人も出ており、アル中患者対策の困難さを切り開くものとして関係者から大きな期待が寄

せられている。

あいらん地区と単身者

10 年前に釜ヶ崎の大暴動があり、この年 5 月にも暴動が発生した。あいらん地区でのアル中患者が急激に増大し、彼らが騒ぎを大きくする要因の一つとして、アルコール症関連問題がマスコミに大きく取り上げられた。特に単身者のアル中患者のアフターケアの必要性が説かれ、その成功例として、弘済院断酒会や、断酒会関連記事が、各新聞に相次いで報道され、大阪断酒会がそのつど紹介されている。

昭和 49 年 (1974)

1月(読売新聞)

『酒を断つ会・励まし合い脱落防ぐ・家族ぐるみの入会も』

大阪断酒会を大きく取り上げ、アルコール問題研究所作成の「アル中指標」での自己診断表や、自分がアル中ではないかと少しでも頭をかすめたら、一度断酒会の門を叩いて見たらと、大阪府断酒会を紹介している。



11月(朝日新聞)

『広がるアルコール中毒・家族ぐるみ集まり、再起目指す断酒会』

家族の理解と協力

断酒継続は家族ぐるみでと、家族の協力と理解が必要不可欠であることが認識され、特に婦人部会の例会の様子や家族の体験談などが数多く紹介され、家族の積極性が断酒継続に大きな役割を果たすと強調されてきた。

関西の断酒会の紹介記事もあり、断酒会が酒害者の更生に果たす役割について評価されている。しかし、一方では、この間にもアルコールが原因で引き起こす痛ましい数々の事件が報道されていることも見過ごせない。

昭和 51 年 (1976)

11月(朝日新聞)

『ふえるアル中主婦』

主婦のアル中患者が急増しているという。街角の立ち飲み屋でも、子どもの手を引いた「奥さん風」の出没が目立つようになった。母親のアル中が原因での、

家庭悲劇も相次いでいる。家庭に閉じ込められがちだった主婦が、酒に親しむようになるまでには、男性と違った背景があるようだ。

病院、街角、また事件を通じての取材が掲載されている。

昭和 54 年 (1979)

11 月 5 日 (朝日新聞)

「終わりなき闘い全国に断酒会員 3 万 5 千人」

「苦勞の多い相談員医療体制の確立を切望」

12 月 (NHK 教育テレビ)

『サラリーマンライフ、この酒断ち難きもの』

大阪精神衛生相談所・真野元四郎氏 (当時) の解説をまじえ、酒を飲まなくても、会社での付き合いに何ら支障はない実例を語るため、濱野副会長 (当時) 他 2 名が出演した。また例会の体験発表や、酒なしで楽しくやっている断酒忘年会の様子を紹介。

濱野副会長 (当時) の話

「この NHK 教育テレビの放映は、日曜日の午後 6 時 30 分からであり、サラリーマンが翌日の話題として見ている番組で、『サラリーマンライフ、この酒断ち難きもの』を見ていた会社の工場長から『君は大変良い事をしていないか。社員にも酒の怖さについて教育してくれ』と褒められ励まされ、それからは、上司の理解のもとに断酒活動に専念することができた」

昭和 56 年 (1981)

1 月 (朝日新聞)

『大変だ!「アル中予備軍」増大』

厚生省が 4 日に発表した「心の健康・54 年保健衛生基礎調査結果」によると、日常の不満やいらいら等のストレス解消法として、女はおしゃべりでまぎらわすが、34.6%、男は 21.7% が酒を飲むという結果が出た。男は「毎日酒を飲む」が成人の 37% に達している。

3 月 (日本経済新聞)

『サラリーマンシリーズ第 40 話「酒」』①～⑧

アルコール症は現代社会の病理現象といわれる。このシリーズは、サラリーマン生活の^{あつれき}軋轢の中で、酒の魔力にとりつかれたサラリーマンの生きざまを、いずれも実在の人物がたどった酒とのかかわりをもとに、赤裸々に描いている。シリーズの⑦では、濱野副会長 (当時) が、③には小杉先生が登場する。

書籍紹介

このサラリーマンシリーズは、日本経済新聞社編新潮社から文庫本として、様々なサラリーマンの姿を「ドキュメント・サラリーマン①②」として発行されている。



昭和 57 年 (1982)

10 月 (朝日新聞)

『普通の女性に増えるアル中、一人で飲み始めたら危険信号』

人生の切れ目で、ふとした心のスキにアルコールが忍び込んでくる。そのきっかけは男性と違って心の危機にあることが多い。女性を取り巻く社会状況の変化とも決して無縁ではない。

アルコールの魔手にくれぐれもご用心!

症状が出たら、精神科医に相談を。また、酒を断つには女性酒害者の会もあり、相談に応じてくれる。「全断連」と「マック」を紹介。

昭和 58 年 (1983)

5 月 (毎日新聞)

『ストレス社会・増えるアル中患者』

『必要な悩める家族対策相談の場、増やせ』

(「なにわ」などアル症関

係冊子の写真掲載)

11 月～12 月 (毎日新聞)

『家族シリーズ「抜け出す』』



大阪北部に住む実在の主婦の、アルコールにのめり込んで行く過程から、立ち直って行く体験が生々しく語られている。勤め先の同僚とのパブ通いでアルコールを覚え、工務店を営む夫が事業に失敗、夫の借金でサラ金業者に追い回され、生活の歯車が狂っていく中でアルコールにおぼれ込み、遂に廃人同様に…。すさまじい体験をして、アメシストの会にたどりつき回復して行く過程が、20 回シリーズとして掲載され、大きな反響を呼んだ。

12 月 (毎日新聞)

『家族シリーズ「アルコール依存症」』上・中・下

前シリーズの続編として、「主婦の酒害を考える」をテーマに、社会的、心理的、病理的な視点から専門

機関による解説や問題点の指摘が、3 回にわたり掲載された。

昭和 59 年 (1984)

5 月 (朝日新聞)

『警告! 女性のアル中増加中 専業主婦に多いキッチンドリンカー家庭崩壊の一因にも』

昭和 60 年 (1985)

7 月 (日本経済新聞)

『アル中患者全国で 220 万人』
「入院患者の 100 倍予防・治療体制整備が急務」

7 月 (サンケイ新聞)

『アル中患者 220 万人に』
「公表数の 100 倍予防・治療見直しへ」



各紙によると、厚生省が行った「飲酒パターンとその健康への影響に関する調査」結果、「全国でアル中患者 220 万～300 万人と推定される」と発表された。厚生省は、今秋をめどに公衆衛生審議会のアルコール問題対策委員会で予防、治療体制の整備拡充、自動販売機方式の制限などを中心に検討するが、アルコール対策の大幅な見直しを迫られることになる。

8 月 (毎日新聞「社説」) 『酒害に真剣な取り組みを』
(朝日新聞) 手紙・私の場合シリーズ 『酒との闘い』

全国各地から寄せられた酒害体験者の手紙を特集。「母の自殺さえ救えなかった兄」「断酒会で立ち直った」「断って 4 年、生きる喜び」「死ぬのは自分の身勝手、子の寝顔思い出して気づいた」「依存症の治療は一つ、節酒でなく断酒のみ」など数篇が掲載された。

10 月 (朝日新聞)

『全日本断酒連盟 保健文化賞受賞会員いま 4 万 5 千人』
「今日の我慢説き 22 年」

地域の断酒会づくりとアルコール中毒になった人たちの社会復帰を促進してきた全断連が、『保健文化賞』(第一生命保険主催、朝日新聞厚生文化事業団など後援)を受賞と大きく掲載された。我が国のアルコール依存症は約 220 万人。最近では、若い人や女性にもアルコール依存症が増えており、酒を断ち切るための組織の重要性も高まっている。会の組織と活動が紹介され

た。

10 月 (毎日新聞)

「社説」『未成年者を酒害から守ろう』

公衆衛生審議会精神衛生部会が厚生大臣に出した意見書「未成年者への酒害の啓蒙、酒類



自販機の規制、広告・宣伝の自主規制、アルコール専門の外来治療や病院の整備、アルコール依存症患者の社会復帰対策の確立など、アルコール依存症の治療だけでなく、予防や社会復帰を含む包括的対策を確立すべきである」などを指摘し、政府は今年度、酒税に 1兆 9,550 億円を期待しているが、それと引き替えに、30 年前の 7 倍近い 220 万を超える人びととその周辺の人が苦しんでいる。アルコール問題全国市民協会の調査では、中・高生の約 9 割が飲酒経験ありと答え、その半数近くが月に数回飲むという。

飲酒をファッション化するような宣伝や酒類自販機の自粛、アルコール専門治療の場の充実など、予防、治療、そして社会復帰のための経費を惜しんではならない。

欧米では多くの国が酒類の自販機や、またウイスキーなど度の強い酒のテレビ CM を禁じている。アルコール依存症をこれ以上増やさないために、業界の自粛と国税庁などの指導を期待したい。

11 月 (読売新聞)

『キッチンドリンカー 依存症の女性 20 万人』

「励まし合って酒を断つ 特効薬は夫の協力」と大阪府断酒会で女性会員がずば抜けて多いのは、全国的にも酒害者のための行政、医療が完備、断酒会活動が活発なためだ。

12 月 (毎日新聞「社説」)

『人権を守る精神衛生法改正を』

国民の精神的健康の保持及び向上を図ると共に、患者の個人としての尊厳を尊重し、その人権を擁護しつつ、適切な精神医療の確保及び社会復帰の推進を図ることを基本的な方向とすべきである。何よりも必要なのは、精神障害者を見守る周囲の人たちの「温かいまなざし」だ。改正法はまた、われわれ一人ひとりに、心を病む人への差別意識がないかどうかを、きびしく

問いかけてくるのである。

12月(サンケイ新聞)

『大阪のアルコール医療進んでる!』

『医師、患者組織、行政連携ピタリ、進むネットワーク』

公衆衛生審議会が意見書を厚生省に出した今年を、「アルコール対策元年」と位置づけ、「アルコール医療では大阪が日本一の先進府県」と評価している。大阪府の病院ベッド数が全国の1/3を占めており、医師・ケースワーカー・心理士などのスタッフが充実し、治療プログラムが確立している。また再発防止のため協力し合う断酒会の数も会員数も全国一である。一方保健所を核にしたアルコール対策の地域ネットワークでも「酒害対策懇談会」「酒害者家族会」などが保健所単位でつくり、医師や断酒会の会員、保健所の精神衛生相談員らがスクラムを組んでアフターケア全般に目配りしている。

医療関係者と断酒会との横の連絡や研究組織としてアルコール問題研究所があり、行政の協議の場としてはこの夏に大阪府酒害対策研究会も発足した。しかし、①専門病院のない大阪市内、河内地区をどうするか、②病院と地域・家庭をつなぐ中間(社会復帰)施設の整備をどう進めるか、などの問題点もある。一般内科医のアルコール症への理解をより深めるための方策も必要である。大きな視点に立てば、大阪も「元年」の域を一步出ているに過ぎない。

昭和 61 年 (1986)

9月(朝日新聞)

『アルコールの問題に取り組む協会設立へ』

アルコール関連問題と取り組んでいるケースワーカーたちが「日本アルコール関連問題ソーシャルワーカー協会」の設立総会を開催。今後は研究会や研修会の開催、他機関との連携を企画している。

10月～翌昭和 62 年 1 月(読売新聞)

『アルコール幻影シリーズ依存症の女たち』①～⑤

「主婦のアルコール依存症、いわゆるキッチンド



リンカーと呼ばれ、家庭問題につながるケースも少なくない。なぜ彼女たちは酒に溺れるのか、アルコール依存症とはどんな病気で、なぜこわいのか—その実態と背景を追ってみた。

山口県のアルコール依存症に悩むある主婦からの手紙が新聞社に届いた事が取材を始めるきっかけになった。」

こんな書き出しで始まるこのシリーズは、彼女たちがアルコールにのめり込んで行く過程や、立ちなおろうと一所懸命酒と闘っている姿、酒を断ち切つて得た幸せなどを、本人の立場から、また病院の視点から、そして断酒会や「アメシスト」を通して、様々なケースを 15 回にわたって特集したものである。

シリーズ終了後の新聞には、この「アルコール幻影」が反響を呼び、問い合わせがたくさん寄せられた。本人や家族が気軽に相談できる機関として、保健所や専門病院、自助グループとしての断酒会や AA、女性だけの自助グループとして大阪には「アメシストの会」と「優芯クラブ」があり、問い合わせは大阪府断酒会へと紹介している。

書籍紹介

妻たちの思秋期(講社プラスアルファ文庫)

酒におぼれこんでいく妻の心を振り向こうともしない夫、目標の喪失感、夫婦とは?生活とは?主婦 6 人の様々な軌跡を追った。

ジャーナリト 斎藤 茂男のルポ

昭和 62 年 (1987)

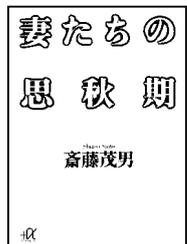
2月(毎日放送テレビ社会教育番組)

『現代を生きるアルコール対策1大阪からのメッセージ』

小杉先生、今道先生、豊中保健所・豊中市断酒会・高槻市断酒会他の出演で、医療機関・行政・断酒会が一体となり地域にネットワークづくり、対策の取り組みが進んでいる大阪を実例として放映された。

9月(NHK テレビ)

21 周年記念大会を NHK が取材し、即日ニュース番組の中で放映された。



昭和 57 年～ 63 年頃 (1982 ～ 1988)

この頃には、アルコールが身体に及ぼす障害や、ストレス社会の反映でアル中予備軍やアルコール依存症者が増えてきている。また主婦や OL といった普通の女性のアルコール依存症が増えてきている。

公衆衛生審議会の答申にもかかわらず、アルコール飲料のファッション化傾向と若者モデルによる CM の影響で、若年飲酒者の増加、特に若い女性飲酒者の増加が表面化してくる。

アルコール依存症になっても、断酒すれば回復するという、アルコール依存症から立ち直る組織としての断酒会の活動が広く報道され、断酒会の果たす役割が重視されてきた。

平成元年 (1989)

5 月 (読売新聞)

『患者の姿赤裸々にアルコール依存症の啓発ビデオ』

市民団体 (ASK) が、実例を下敷きにアルコール依存症の患者を扱ったユニークなビデオを制作した。

「シリーズアルコール依存症全 5 巻」

①アルコール依存症とは ②患者の心理 ③家族の心理 ④依存症からの回復 ⑤酒なし生活術

平成 3 年 (1991)

8 月 (毎日新聞)

『各地の断酒会 依存症は治療が必要』

「飲みたい時間に、年中どこかで例会」

小杉先生の談話や、一泊研修会や例会の様子、また全国各地の断酒会の所在地や、会員数、会費などを詳しく紹介。

平成 4 年 (1992)

5 月 (読売新聞)

『退職がひきがね短期間で依存症に』

アルコール依存症患者の高齢化問題に触れ、10 年間で患者倍増、退職が引き金に、また短期間で依存症にと警告。

高齢者とアルコール

高齢化が社会問題として何かと話題を提供する中で、アルコール問題も例外ではない。高度成長を担ってきた働き蜂人間が、そろそろ定年退職の時期。仕事一本槍からいきなり「毎日が日曜日」となって、時間の過ごし方の要領をつかめないまま、つい酒に…。高

齢者のアルコール依存症者が10年間で倍増。アルコール医療の進歩、研究の中で、共依存の問題や、次世代の AC・AAC が表面化、その対策が論議されはじめる。

平成 5 年 (1993)

6 月 (新聞名不詳)

『20人に一人がうつ病 アルコール依存症は10人に一人』

健康保険組合連合会が、大企業で診療している産業医グループに委託して中高年の男性社員 (39 ～ 59 才) を対象に面接調査したところ、うつ病と診断された人 5%、アルコール依存症 10%、その予備軍 5%、その他気分障害 5%、不眠症 2% という結果が出た。

(担当医の話)「企業に詰める産業医は、体の健康だけでなく心の健康についてもケアする必要がある。企業内でのメンタルヘルス(心の健康)に対する取り組みを強める必要がある」

平成 6 年 (1994)

6 月 (朝日新聞)

『「投稿特集」アルコール依存症』

「酒なんていつでもやめられると甘く見てませんか?」

「家族の悩みや断酒会の人たちの熱意、どれも身にしみる思い」

各地から寄せられた投稿記事を中心に、「家族からの訴え」や「体験」「断酒の動機」また「専門医の助言」「自助グループの必要性」などを特集している。



平成 7 年 (1995)

1 月 (朝日新聞)

『アルコール依存症シリーズ』①～④

①「死に至る病、患者 240 万人、家族も被害」

依存症になる過程や身体障害について説明している。またそれに関連して AC の問題にも触れている。

②「むしばまれる若者 進行早く 影響より深刻」

若者の飲酒人口が増加。進行速度が 20 代では 4 年、10 代では僅か数ヶ月～ 3 年と非常に速い事や、成人に比べ、体に深刻な影響を与える事が確認されている。特に脳萎縮の症状が成人患者の 5 倍という。また 30

才以下の患者 83 人の追跡調査では 17% 弱が死亡していた。

③「予備軍 悪い酒癖 早めに自覚」

病気が進行してからでは、回復に相当なエネルギーが必要で、本人も家族もボロボロになってしまう。

早期発見、介入に取り組む企業も出てきた。

(例 三菱重工神戸造船所「病気が進むと仕事の能率も落ち、企業もマイナスになる。早期であれば、治療も短期間でできる」)

④自助グループ「患者の回復支える存在」

断酒会・AA など自助グループの存在意義を当事者の体験談をまじえて強調している。また、共依存関係について専門医は「患者本人に自分の頭で断酒を決意させることから回復が始まる。泥酔している患者を介抱したり、家族が会社に欠勤の連絡をしたり、子供に父親が酒を飲まないか監視させて、結果的にもたれ合いを許すような関係が、家族の意図に反して、患者の飲酒を助け、病気を進行させてしまう」

9月(日本経済新聞)

『回復の道のり映画に大阪・断酒会も協力』

アルコール依存症者が回復を目指して試行錯誤する姿を記録したドキュメンタリー映画『もうひとつの人生』が、大阪の断酒会のメンバーの協力で完成した。

もうひとつの人生について

映画を監督した小池監督は「映画の取材は多くの人たちの体験談を聞くことに費やした。ある時、まったく突然に、ふるさとの魚屋のおじさんを思い出した。自転車の荷台に魚のトコ箱を乗せ、赤い顔に、酒臭い息を吐き、ふらふらと行商してまわる。厳冬の朝、魚屋さんは凍死体で発見された。ひとびとは、あの人はアル中だったから酔っぱらって、どこでも眠り込み、酔心地のまま気持ち良く死んだのだと嘯き、当然の事故だと噂した。ひとりの死に対して心を寄せる者は、誰もいなかった。死者は理解もされず、忘れ去られたが、十歳の私の胸に割り切れない気持が残った。

40年たって、不意打ちのように思い出から甦った魚屋のおじさんの記憶を、映画で伝えることが、私の仕事であると思った。でき上がるべき映画のひとりの観客として、



このひとがいる。凍死し、アル中という名で封殺された人間の存在は、私たちの映画の幻の観客のひとりであることに気がつく。…映画は生まれると確信した。」と語っている。

20人の医師やケースワーカーと会い、130人の体験談を聞くため、大阪中を駆けめぐったスタッフの想いもまた、この述懐に集約されている。

映画評論家、田中千世子氏は「驚いた。そして感動した。この映画では、アルコール依存症の実態は、数値や解説ではなく人々の肉声にこめられる。それをどう受け止めるかは、私たちの人間性にかかっている」と書いている。

映画は、平成7年から8年にかけて、断酒会はもちろんのこと、保健所、福祉センター、町づくりグループなどの手によって日本各地で上映された。映画の製作と上映は、新聞各紙で伝えられ、映像によってアルコール依存症者の苦悩と再生を訴えようとした全断連の画期的な試みは、映画『もうひとつの人生』によって、酒害活動の新しい糸口を得たと言える。

阪神・淡路大震災

1月17日に発生した、阪神・淡路大震災による被災者の中に、精神不安定や虚脱状態から、多量飲酒による「アルコール依存症予備軍」が増加している。この対策には行政当局と断酒会が連携し、防止救済活動に取り組んでいるが、中でも酒害者救済活動で大きな役割を果たしている断酒会の存在が、一般市民の関心と呼ぶことになった。しかし、仮設住宅で単身者がこの後アルコール依存症に陥り、孤独死が社会問題となる。

平成8年(1996)

9月(朝日新聞)

『アルコール依存症知って』

市民団体アルコール問題全国市民協会(ASK)がアルコール依存症に関する通信講座を始めた。イッキ飲みによる死亡事故の続発に対して、市民団体が「死のゲームなくせ!」と、防止・撲滅キャンペーンを展開。一方、自販機問題やアルコール飲料のファッション化、ヤングアイドルによるCM等の問題が棚上げされたままの中で、中学生や高校生など予想以上に未成年者飲酒の裾野が広がり、日常化して来ている。

平成 9 年 (1967)

3 月 (毎日新聞 朝刊)

『家族神話の解体「アダルト・チルドレン」という物語』

この現象が始まってまだ二年も経たない。アダルトチルドレン (AC) ということばに強い関心を示す学生が急に増えだしたのだ。しかも、自分の問題として捉えているのだが、悲観的な深刻さはない。もともと AC とは、アルコール依存症の親をかかえるなど機能不全をきたしている家族の子ども達、さまざまな虐待にさらされて育った子ども達をさす言葉だ。アメリカ合衆国で、それも医師ではなく、ケースワーカーなどパラメディカルの人たちのジャーゴン (業界符丁) として使われだしたものだ。公式な医学診断基準にはいまだ採用されていない。はたして家族の崩壊なのか。だが、家族の危機が叫ばれるなど今に始まったことではないし、いったいなにが起ころうとしているのか。

アダルトチルドレン (AC) が新聞でとりあげられた。

書籍紹介

私は親のようにならない (誠信書房)

著者：クラウディア・ブラック

監訳：斎藤学

親のようにならないと思うアルコールリックの子どもたちが、なぜか成人してアルコール依存症になったり、アルコール依存症者の妻になったりする確率が高い。子どものときから彼らが縛られてきたルールと人間関係のあり方を書いた本。初版以来 20 年間の精神・神経臨床の世界の変革を反映し、内容が大幅に変わった「改訂版」です。

12 月 (朝日新聞)

『酒害 依存症治療のいま上』

「隠れ患者」を探し出せ
「早期発見は内科医がカギ」

大阪市西淀川区にある内科中心の西淀病院 (258 床)。内科医の赤路英世さんは「依存症の患者は酒飲んで臓器壊して、治すとまた飲んできて入院。言うことは聞かんし、正直、迷惑だと感じていた。だから 9 年前、近くに精神科クリニックができて患者を受け入



れると言われた時はありがたかった。どんどん送りましたよ」と笑う。当初はそんな認識だったが、「どうせだめ」と思っていた患者が次々と回復していく姿を見て、西淀病院のスタッフたちの見方も変わった。アルコール専門医を招いて勉強会を開き、断酒会にも顔を出すようになった。

1992 年 5 月からは月に 2 回、院内の患者向けに講座を開いて、依存症がどんな病気かを説明、断酒会会員の体験談も聞いてもらい、専門治療を受けるきっかけを作っている。

平成 10 年 (1998)

8 月 (日本経済新聞)

『サラリーマン第 460 話 「一杯の酒」』①～⑨

- ①大失態で断酒決意
- ②酔い求め孤独深める
- ③第 2 の人生再生を誓う
- ④救いを求めた果てに
- ⑤息子の一言支えに ⑥心の



スキを突く欲求 ⑦地獄に戻りたくない ⑧事故の記憶めぐえず ⑨娘の涙、そして 10 年

このシリーズでは、3 話ずつサラリーマンが酒にとらわれ断酒会へ行き断酒に踏み切り継続するまでの体験談が掲載されている。⑥では指針と規範と酒をやめたい人のためにのリーフレットの写真が掲載された。

平成 8 年～平成 10 年頃 (1996～1998)

阪神・淡路大震災によるストレスにより、アルコール依存症になる (特に単身者) の記事が目立つ。

『阪神大震災関連 阪神大震災 孤独死の周辺 酒に逃避する働き盛り』 (平成 8 年 11 月 毎日新聞)

『仮設孤独死の 3 割 肝疾患 アルコール依存裏付け 神大調査』 (平成 9 年 2 月 毎日新聞)

『働き盛り…酒への依存、すい臓疾患 野菜づくりでリハビリ』 (平成 9 年 4 月 毎日新聞)

『あしたへ◆被災地再生への道 5 アルコール依存症』 (平成 10 年 2 月 朝日新聞)

『シリーズ「仮設で死ぬということ」』

(平成 10 年 4 月 朝日新聞)

- ①閉じこもる 挫折感と寂しさ②逃げ込む切なさ紛らわす

平成 11 年 (1999)

4 月 (読売新聞)

『99 年春の褒章 藍綬褒章 新生会病院長・和気隆三さん 61』

◆アルコール依存 患者復帰支援

和気先生が受賞の喜びよりアルコール依存症の専門機関があることを周知の機会にしたい。「アルコール依存症の誤解を取り除いて出来るだけ早期に治療を受けられる状態にするのが責務です」と述べられている。

6 月 (産経新聞)

『アルコール依存症 克服体験話します。6 日に豊中断酒会。』

「豊中市断酒会」(石田貞夫会長、80 人)が結成 25 周年を迎え、6 日に豊中市立市民会館(曾根東町)で記念大会を開く。一般の方を呼びかけた記事。

平成 12 年 (2000)

1 月 (読売新聞)

『アルコール依存症の回復者に支援を 生活面のサポート必要』

社会復帰のための中間施設 リカバリハウス「いちご」を紹介

平成 13 年 (2001)

5 月 (NHK)

『未来への教室』

「ローラ・ボー」

—アルコール依存症から回復した妖(よう)精—
70年代の人気ゴルファー、ローラ・ボーは、アルコール依存症に苦しみ、7人の子どもたちとの間には深い溝ができた。番組では、親子のきずなを取り戻したローラ・ボーが、アルコール依存症の親と子どもたちという、家族の問題を考える。

【声】松坂 慶子

10 月

『手を携えて「アルコール依存症の妻を持つ夫の会」発足／大阪』

北区の大阪ボランティア協会の一室で初会合。参加者はわずか 2 人だった。



本人の写真を前に、断酒会のパンフレットを広げる。(大阪府内)

平成 15 年 (2003)

9 月 (毎日新聞)

『サラリーマンと呼ばないで 新しい生き方 I』

依存症が教えてくれた

①自分が壊れていった②いい数字を出さなければ③人一倍仕事をしてたのに④自分も同じじゃないか⑤無理に男らしくしなくても、の 5 回シリーズ 大手出版社の男性の体験談を掲載。

11 月 (日本経済新聞)

『拝啓こんな日々です。第 4 話』

乗り越えていま③ 妻の断酒支え つかんだ幸せ

アルコール依存症の妻を持つ夫の体験談。断酒してから長男が生まれ名前は、断酒会の合言葉から一字もなかったという。断酒会のパンフレットを広げる(大阪府内)の写真を掲載。

発刊月不明 (別冊週刊実話)

『記者も体験! 覚醒剤・ガンより怖い!? “アルコール依存症” の恐怖とその実態!』



記者が入院した大阪のアルコール治療専門 S 病院へ入院。体験談は、4 ページに渡る。

平成 16 年 (2004)

4 月 (日本経済新聞)

『断酒の会、女性の交流盛ん』

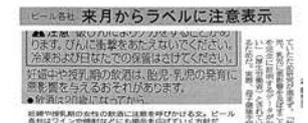
2003 年全日本断酒連盟では全体の 6.6% に AA では 20.4% となった。ただ、米国の AA は 3 人に 1 人が女性。「米国に比べ、病院や断酒会に行かず苦しんでいる依存症の女性は潜在的に多い」アルコール依存症の女性が増えるにつれて、断酒コミュニティでの女性同士のつながりはさらに重みを増しそうだ。

5 月 (産経新聞)

『妊娠、授乳期の飲酒やめて』

少量でも発育に悪影響 死産、流産の可能性も

ビール各社来月からラベルに注意表記。6 月からビールや発泡酒などに、妊娠や授乳期の女性の飲酒について注意を呼びかける表示が付けられるようになった。



6月(朝日新聞)

『アルコール依存症全国推計 82万人 成人男性の約2%』

厚生労働省の研究班が02年度から3年間にわたり成人の飲酒実態を調べ、世界保健機構WHOの基準に基づき行った初の全国調査で明らかになった。



11月(大阪日日新聞)

『再生 アルコール依存症は今』

- ①復活(魔物に取り付かれた10年)
 - ②通院(迷った末クリニック)
 - ③性差(危険、女性の習慣飲酒)
 - ④きずな(家族の精神ケア不可欠)
 - ⑤啓発(酒害脱却へ社会理解必要)
- の5回シリーズ



②では1981年日本初のアルコール依存症治療を専門にした診療所「小杉クリニック本院」④では新阿武山病院の家族会⑤では豊中市断酒会の井上さん(故人)の立ち上げた「酒害をなくそうネット」が紹介された。

12月(読売新聞)

『アルコール依存症の長男殺害 猶予付き温情判決』

高槻市の70歳の父が、アルコール依存症で暴力をふるう長男(39歳)を殺害。長男の世話に万策尽きた末の犯行で、我が子を手にかけて責任を痛切に感じており、もはや司法が罪を償わせる必要はない、と執行猶予付き判決が出た。この判決は、判例として後に同様の事件も執行猶予付きとなっている。



平成17年(2005)

2月(女性自身)

『シリーズ人間 アルコール依存症女性たちが幻覚と幻聴のはざまで見えたもの』

全日本断酒連盟事務局宮田さんの手記。「わずかに残った“母性のかげら”が私を引きとめた」と語っている。全7ページ。



3月(読売テレビ)

『「ウーマンズ・ビート」大賞 カネボウスペシャル 21「溺れる人」放送』

アルコール依存症と闘う女性の実話をもとにしたドキュメンタリー。



ドラマは、アルコール依存症者の症状を描くとともに、依存症と闘う主人公の姿を通し、夫婦とは何か、家族とは何かを問いかける。

監督：雨宮 望 主演：篠原 涼子

11月(西日本新聞)

『ある女性の挫折アルコール依存症』

3回シリーズ。女性の社会進出が進みアルコール依存症が増えていることへの警鐘。

- ④過剰適応「仕事のうち」と飲む危うさ 完璧主義が落とし穴
- ⑥家庭崩壊 心を開いて生き方を見直す
- 亡父の残像を乗り越え
- ⑩記者ノート 勇気があるけど自分隠さず 回復妨げる周囲の偏見

12月(毎日新聞)

『酒 女性・高齢者・"個欲"の依存症増加』

小杉クリニック本院 小杉院長が「女性や高齢者、静かに一人で飲むタイプの依存症が増えている」と指摘している。

平成18年(2006)

4月(日本経済新聞)

『待った! 未成年飲酒 大学でチラシ「強要は犯罪」』

9月(毎日新聞)

『酒類販売：地域規制を撤廃 スーパーなど一斉に免許申請へ』

酒類規制が完全自由化になったという記事。

『酒類規制緩和について』

1995年時点で、4割以上を占めていた「一般酒販店」は、酒のディスカウントストア(以下、酒量販店)に押される形で縮小していった。その酒量販店も1998年頃から成長が鈍化し、2001年の距離基準廃止以降、徐々に縮小してきた。

1998年以降、ドラッグストアなどの新規参入も見られるものの、構成比としてはまだそれほど大きくはな

い。この間、最も規制緩和の恩恵を受けたのは「スーパー」であった。酒類市場が漸減していく中、スーパーでの消費量は徐々に伸びていった。2006年には酒類の5割以上がスーパーでの購入となり、一般酒販店や酒量販店といった酒類の専門店をしのいでいる。また、この間の主要ルートの伸張状況をみるとスーパーは規制緩和のたびごとに大きく伸ばしている。一方、酒量販店は2000年にマイナス成長に転じ、規制緩和の進展とともに苦戦を強いられている。2006年になって、ややマイナス傾向に歯止めがかかりつつあるが、2006年の規制緩和の影響が懸念されるため、引き続き予断を許さない状況にある。

2001年に「距離基準」が廃止される。距離基準とは、酒販売店の間には一定の距離を置かなければならないという規制のこと。距離基準があると、既存の店の周りには新規出店出来なくなります。今でも、タバコ販売については距離基準の規制が残っています。

2003年に「人口基準」が廃止される。人口基準とは、地域の人口に応じて酒販売の免許枠(数)を制限する規制のこと。距離基準と同様、新規出店を妨げて既存の店を保護することが目的でした。

2006年に「緊急調整地域」が廃止され、完全自由化される。緊急調整地域とは、酒の過剰供給がなされている地域のこと。この地域については新規出店が規制されていました。この規制が無くなることで、酒の販売は完全自由化されることとなります。

10月(毎日新聞)

『酒害』目をそらさないで』

堺市断酒連合会 古田 忠氏 元中学教師時代の体験談。周囲の信用を失い孤独感から酒に救いを求める「酒のあり地獄」と禁断症状に陥り倒れた。と語っている。

11月(毎日新聞)

『高齢社会と増える依存症』

定年後発症や介護現場での問題点の5回シリーズ

①重症化して、ようやく問題に「やめたいけどコップに手が」 ②断酒約束させ自覚促す「利用者本位」に悩



んだ介護職 介護現場での体験談 ③「家族の病気」身近にも被害が 患者と離れられない「共依存」 ④気兼ねする必要なくなり 定年後に発症 ⑤退院後も支援 断酒に成功 訪問介護の意義

⑤では新生会病院とデイサービス施設との連携や東大阪市の訪問看護ステーション「ふろーる」の辻本さんの高齢アルコール依存症への訪問看護の有効性が記事となる。

書籍紹介

ところをはぐくむ

アルコール依存症と自助グループの
ちから 著者：今道 裕之

アルコール依存症からの回復の道は、完全に酒を断って新しい生き方を自ら創造していくしかない。治療に正面から取り組む著者が、アルコール依存症の全容と回復の活動を通して、現代に生きる人の不安への処方箋を提示する。



平成16年新阿武山病院 理事長退任後執筆をされ、平成17年9月に初版。発行後翌年2月に亡くなられた遺作です。

12月(毎日新聞)

『許すな飲酒運転 酒止められず違反…実刑』

父見とれず後悔の日々「もう免許は取らない」

12月(朝日新聞)

『欧米着々と対策 悲劇繰り返さぬ』

各国の飲酒運転対策の記事 検知装置の義務化』

脱アルコール教育を徹底。ベルギー・スウェーデン・アメリカの事例を紹介。

平成19年(2007)

7月(毎日新聞)

『仲間の励ましが癒やしに』

『大阪市断酒連合会結成40周年 心開き 連帯広がる』

アルコール依存症からの立ち直りを目指す人たちで作る大阪市断酒連合会が今年結成40周年を迎えた。「もう、一人で悩むのはやめよう」苦しみを共有する仲間が互いに心を開くことで、連帯を広げてきた。同会は



1967 年 2 月、医師と患者だった 4 人の会員で発足した。会員は徐々に増え、現在 400 人。緒方さん、西沢さん、橋本さん（家族）の 3 名が体験談を語る。

8 月（毎日新聞）

『**刑務所で断酒教育**

法務省方針 再発防止策を強化』

法務省は、飲酒運転根絶のため全国の刑事施設（刑務所、少年刑務所、拘留所）で交通安全プログラムを強化する方針を固めた。今年度以降「飲酒の害」などについて約 50 分の講義を 10 回行う。来年度以降はアルコール依存症の自助グループの協力を仰ぎ「民間活力」による再発防止も進める。

平成 18 年～平成 19 年頃（2006～2007）

7 月に大学 1 年生がキャンプ場で、軟式野球サークルの新入生歓迎合宿中。イッキ・コールの中で焼酎水割り 7、8 杯をイッキ飲み。夜中過ぎ異状に気づいた仲間が 119 番通報したが、救急車が駆けつけた時点で既に心肺機能は停止。死亡が確認された。

8 月に福岡海の中道大橋飲酒運転事故で、市内在住の会社員の乗用車が、飲酒運転をしていた当時福岡市職員の男性（当時 22 歳）の乗用車に追突され博多湾に転落し、会社員の車に同乗していた 3 児が死亡した事故や事件があり、飲酒運転や未成年飲酒に関する報道が多い年だった。

平成 20 年（2008）

3 月放送（NHK 教育テレビ）

『**この人と福祉を語ろう 漫画家・西原理恵子 家族がアルコール依存症”になったとき**』



自分の家族をモデルにした「毎日母さん」。おもしろおかしく大酒飲みの父さんを書いているが、現実戦場カメラマンの夫 鴨志田 穰氏との出会い～アルコール依存症になってからの体験談を語る。

亡くなる前に、子供を傷つけないで済んだ、人として死ぬことがうれしい、と言っていたと。

平成 21 年（2009）

6 月（日経新聞）

『**寝酒、中高年男性に多く**』

日本人はほかの国の人比べて寝酒に頼る割合が高い。眠るためにお酒を飲む



人が男性で 38.8% 女性 18.3% の 2 倍以上だった。寝酒の悪影響のイラストの記載もあった。

平成 22 年（2010）

4 月（朝日新聞）

『**読者をつくる between アルコール規制に賛成?**』

販売規制には共感

はい 62% いいえ 32%

モニターのうち、規制に賛成の人は 62%「父が早死に。残されて酒を恨んだ」（大阪、55 歳女性）「若いころイッキ飲みで友人が亡くなった」（山形、49 歳女性）という痛ましい体験談が寄せられた。

10 月（産経新聞）

『**難しい依存症治療**

病院、仲間…社会との繋がりが必要』

日本初のリカバリー・パレードの様子が写真に載った。また NHK で



10 月（NHK）

『**社会福祉ネットワーク**』

わたしたちの“回復”～日本初 リカバリー・パレード

11 月（新聞名不詳）

『**酒依存 自殺の危険信号**

アルコールが一因 2 割』

国が 2009 年全日本断酒連盟の会員 4,600 人にアンケートをしたところ「これまでに本気で死にたいと考えたことがある」という人が 41% を占めた。「自殺の計画をたてたことがある。」が 23%、実際に行動に移したが 20% だった。海外では、アルコール販売規制に伴い自殺死亡例が減った（ロシア）、個人の年間アルコール消費量が 1 ℓ 増えると、男性死亡率が 1.9% 上がった（ポルトガル）などを紹介。



映画紹介

酔いが覚めたらうちに帰ろう

漫画家 西原理恵子さんの元夫で戦場カメラマンの鴨志田穰さんの自叙伝小説をもとにした作品。東陽一監督は「深刻ぶらず、病気と家族の形を描きたかった。軽さの中の重さをとりました」と話した。



全断連全国(和歌山)大会にて、公開前上演した。

出演：浅野忠信・永作博美

平成 23 年 (2011)

東日本大震災

3月11日、午後2時46分、太平洋三陸沖を震源とするマグニチュード9.0の巨大地震が発生した。震源域の大きさは岩手県沖から茨城県沖までの南北約450キロメートル、幅約200キロメートル。この地震により、宮城県栗原市で震度7が観測されたほか、福島県や茨城県で震度6強、東京都や神奈川県で震度5強など、東北から関東にかけて広い範囲で強い揺れが観測された。マグニチュード9.0という数値は、国内の観測では史上最大だった。また、私たちは阪神・淡路大震災の経験から例会が滞ることや孤独によりアルコール依存症増加の懸念もあり寄付を募った。

12月 (産経新聞抜粋)

『越冬 大震災から9ヶ月』

東北で唯一、アルコール依存症者の専門病棟54床を持つ仙台市の精神科病院、東北会病院は、飲酒問題で受診する人の割合が震災前1年間の平均34%に対し、今年10月は42% 専用病棟の入院は予約待ちという。

平成 24 年 (2012)

1月 (朝日新聞)

『被災者、支えるのは被災者』

東日本大震災の被災者が「生活支援相談員」として仮設住宅を回る動きが広がっている。ストレスで精神的に不安定になる住民が増える一方、専門家が足りないため、精神科医も指導に力を入れる。



生活支援相談員

失業した被災者が自治体や社会福祉協議会に雇われ、保健師とも連携して仮設住宅などに暮らす高齢者の生活支援や自殺防止、コミュニティー育成にあたる。阪神・淡路大震災で孤独死やアルコール依存症が多発したことをきっかけに、2004年の新潟県中越地震の後から普及し始めた。

平成 25 年 (2013)

4月 (産経新聞)

『まちかど人間録』

大阪府断酒会副会長 古田忠さん

酒の怖さで苦しませない

8年ほど前、堺市西区の小学校から「6年生にアルコールの怖さを話して欲しい」との依頼を受けた。子供たちには飲酒が引き起こす依存症の実態を丁寧に話した。今では毎年7、8件小中学校で講演している。



6月 (読売新聞)

『断酒の継続助ける効果 アルコール依存症に新薬』

飲みたい欲求を抑え、断酒を続けられるよう助ける新薬が30年ぶりに発売された。

断酒補助剤レグテクト(一般名アカンプロサートカルシウム)は、興奮しやすい神経の働きにブレーキをかけ、飲酒の欲求を抑える。

6月 (毎日新聞)

『訃報：なだ・いなださん 83歳=作家』

8月 (朝日新聞)

『精神科医・作家 なだ・いなださんユーモアいっぱい自称「ヤブ医者」』

日本初のアルコール依存症専門病棟が作られた国立療養所久里浜病院の責任者。



「治すではなく付き合う」を信条に、辛抱強く依存症患者に向き合い続けた。断酒3ヶ月で酒を飲んでしまった人には「3ヶ月も続いたじゃないか。次は4ヶ月がんばろう」と励ました。患者たちと一緒に風呂に入り、登山をした。

12月 (毎日新聞)

『アルコール健康障害対策基本法：成立 飲酒で健康障害』

飲酒が引き起こす社会問題の

防止策や患者支援を国に義務づ

ける「アルコール健康障害対策基本法」が7日未明、

参院本会議で全会一致で可決、成立した。国や地方

公共団体にアルコール健康障害対策を総合的に策定、

実施する義務があると明記しており、偏見の解消や、

単なる「多量飲酒」とみられがちな潜在的患者の治療、



飲酒運転の抑制につながることを期待されている。

平成 26 年 (2014)

8 月 (産経新聞)

『アルコール依存は 109 万人 厚生労働省研究班推計』

アルコール依存症で治療が必要な人は国内にどのくらいいるのか。条件の違いによりさまざまな数字があるが、厚生労働省研究班 (樋口進代表) が最新の全国調査に基づき、約 109 万人とする推計をまとめた。分析を担当した尾崎米厚・鳥取大教授 (環境予防医学) は「治療が必要なのに受けていない人の多さが明らかになった」と話した。

12 月 (朝日新聞)

『飲酒運転 病根を断て』

大阪府警、検挙者に依存症の受診促す』

酒気帯び運転と酒酔い運転の検挙数で、大阪府が 10 年連続の全国ワースト 1 を記録している。「同じ過ちを繰り返すのが多いのでは」とみた大阪府警は、5 年間に 2 回以上検挙された人を対象に、アルコール依存症の専門医療機関の受診を求める制度を始めた。大阪府高槻市の断酒会員の体験談が載っている。



平成 27 年 (2015)

9 月 (朝日新聞)

『アルコール CM 大人の配慮』

酒類の製造販売の 9 団体でつくる「酒類業中央団体協議会」は、アルコール飲料のテレビ CM などの出演者の年齢を、これまでの 20 歳以上から 25 歳以上に引き上げる方針を明らかにした。「ごくごく」「ぐびぐび」という効果音の使用や、のど元のアップもやめる。



これから自主基準の改正手続きに入り、実施時期は未定という。

10 月 (日本経済新聞)

『社会的損失は年 4 兆円』

アルコールによる社会的損失は年間 4 兆円。厚生労働省



研究班の推計によると、アルコール依存症患者の医療費は年 1 兆円。依存症による死亡や通院、仕事の効率低下によって失った賃金は約 3 兆円に上る。合計すると年 1 兆円余りの酒税収入を大幅に上回り、5 兆円前後との推計が多い「たばこ」による社会的損失に迫る水準だ。

平成 28 年 (2016)

4 月 (読売新聞)

『寂しさから依存症に』

堺市の男性の体験談。仕事をしていた頃は、深酒をすることはなかった。退職後、一変した。趣味はなく、友人もいない。時間をもてあまし、「時間つぶし」に飲み出した酒の量はたちまち増え、記憶を失う「ブラックアウト」に陥るようになった。一昨年 5 月、大けがを治療を受けた病院で「アルコール依存症」と診断された。配偶者の死や中高年になると生活が大きく変化するため、心のバランスが崩しやすい。それが、万引きやアルコール、ギャンブルなどの依存につながるとされる、と警鐘をならしている。

熊本地震

4 月 14 日 21 時 26 分、マグニチュード 6.2 の地震 (前震) が発生し益城町で震度 7 を観測した。その 28 時間後の 4 月 16 日 1 時 25 分には、マグニチュード 7.3 の地震 (本震) が発生し、熊本県西原村と益城町で震度 7 を観測した。その後、震度 5 ~ 震度 6 の余震が 6 月 12 日まで続いている。住宅の全壊が 7,996 棟、また公共建物の被害が 248 棟確認されている。過去の大地震の教訓から、震災後、孤独死した高齢者の多くが、生前、避難所で増えた飲酒量が減らないまま、仮設住宅にこもってアルコールで寂しさを紛らわせていた方であったといわれています。避難所への支援物資にアルコールを入れないということも常識になりつつあります。断酒例会場は確保出来ているのでしょうか? 復興はこれから仮設住宅もまだ建設中です。ただ、「酒が原因で死んでしまう人がいない」ことを願うばかりです。

50 年を振り返る

写真でたどる大阪府断酒会50年

発足までの道程

- 昭和32年 武庫川病院(現・兵庫医科大学病院)でAAA会(現AAと別組織)が発足する 大阪・神戸・池田など12支部ができる
- 昭和39年 金岡中央病院で患者の自治会「水曜会」ができる
- 昭和40年 断酒グループ発足の打合せ会を行う
- 昭和41年 大阪断酒新生会が発足
- 昭和41年 10月 浜寺病院にて大阪断酒会発足準備委員会ができる
- 昭和41年 11月 近畿断酒連盟大阪断酒会が発足
初代会長：二見泰之助氏



大阪府断酒会の出来事

会長 伊藤 聡

- 2月 地域断酒会役員勉強会を大阪市西成区民センターで開催 300名参加
- 4月～6月 第44回酒害相談講習会を東大阪市立イコーラムホールで開催 67名受講



50年史編集作業風景



地域断酒会役員勉強会

全国大会：香川

2016
平成28年
50

世間の出来事

内閣総理大臣 安倍晋三

- ・マイナンバー制度開始
- ・北海道新幹線開通
- ・熊本地震



大阪府断酒会総会員数 892名(4/1現在)

大阪府断酒会の出来事

初代会長 二見泰之助
2代目会長 石野健夫

1月 バッジ・会報の発行
2月 「大阪断酒会規約」設定
11月 第4回全国大会 岡山にて開催

1967

昭和42年

1

全国大会：岡山

世間の出来事

内閣総理大臣 佐藤栄作

- ・ 建国記念の日の適用
- ・ 公害対策基本法交付
- ・ 四日市ぜんそく裁判






初代二見泰之助氏(故人) 2代目石野健夫氏(故人)

昭和42年物価

たばこ (ゴールデンバット) 30 円
新聞購読月580 円 はがき7 円
ビール120 円 映画封切館500 円
国鉄初乗り20 円 ラーメン100 円
理髪420 円



大阪府断酒会の出来事

会長 石野健夫

1月 全日本断酒連盟に加盟
4月 全断連理事会を初めて大阪にて開催
8月 機関紙「なにわ」創刊号発行
10月 大阪断酒会6支部及び婦人部設置
11月 2周年記念大会 浜寺病院厚生会館にて開催
12月 大阪断酒会が関西テレビ出演

1968

昭和43年

2

全国大会：静岡

世間の出来事

内閣総理大臣 佐藤栄作

- ・ 小笠原諸島が本土復帰
- ・ 三億円事件
- ・ 東大紛争、日大紛争など
全共闘運動激化



なにわ創刊号

昭和43年ヒット曲

1位 千昌夫
『星影のワルツ』
2位 ザ・フォーク・クルセダーズ
『帰って来たヨッパライ』
3位 ピンキーとキラーズ
『恋の季節』



大阪府断酒会の出来事

会長 石野健夫

3月 大阪断酒会がNHKテレビ出演
8月 泉大津市で精神福祉衛生協議会主催
「お酒と家庭」をテーマにした研究会
に大阪断酒会から5名参加して体験談
発表

1969

昭和44年

3

全国大会：高知

世間の出来事

内閣総理大臣 佐藤栄作

- ・ サザエさん放送開始
- ・ 東名高速道路全線開通
- ・ アポロ11号月面着陸成功



アルコール

昭和44年プロ野球順位

セリーグ	パリーグ
1 巨人	1 阪急
2 阪神	2 近鉄
3 大洋	3 ロッテ
4 中日	4 東映
5 アトムズ	5 西鉄
6 広島	6 南海



大阪府断酒会の出来事
会長 石野健夫

3月 大阪断酒会婦人部例会初開催



4月 3支部増設 9支部となる

1970

昭和45年

4

全国大会：北九州

日本万国博入場料金

大人（23歳以上）：800円
 青年（15～22歳）：600円
 小人（4～14歳）：400円
 ※当時の平均月収は5万円

世間の出来事
内閣総理大臣 佐藤栄作

- ・日本万国博覧会(大阪)開催
- ・よど号ハイジャック事件



大阪府断酒会の出来事
会長 石野健夫

4月 12支部となる

5月 アルコール問題研究所を天王寺区
大阪市立大学医学部附属病院前に設置

11月 大阪断酒会5周年記念大会開催



1971

昭和46年

5

全国大会：東京

昭和46年テレビ番組

アパッチ野球軍 アンデルセン物語
 帰ってきたウルトラマン 仮面ライダー
 国松さまのお通りだい ゲゲゲの鬼太郎
 さるとびエッチャン オバケのQ太郎
 スペクトルマン タイガーマスク
 ふしぎなメルモ ルパン三世

世間の出来事
内閣総理大臣 佐藤栄作

- ・「8時だよ！全員集合」視聴率50%
- ・沖縄返還協定調印
- ・ボウリング大流行
- ・東京銀座にマクドナルド1号店



大阪府断酒会の出来事
会長 石野健夫

1月 大阪府ケースワーカー研修会にて
断酒会の説明と講演

4月 13支部となる

8月 近畿ブロック協議会が発足

10月 ラジオ大阪、NHKテレビで断酒会紹介



1972

昭和47年

6

全国大会：広島

昭和47年名古屋場所番付表

東	位	西
北の富士	横綱	清國
大麒麟	大関	張出 琴櫻
	輪島	関脇 貴ノ花
	三重ノ海	張出 魁傑
	長谷川	張出
	金剛	小結 前の山

世間の出来事
内閣総理大臣 田中角栄

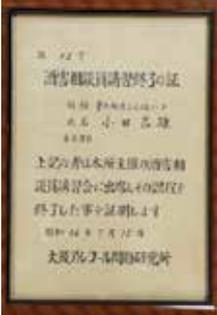
- ・札幌オリンピック開催
- ・浅間山荘事件
- ・日本列島改造論




大阪府断酒会の出来事

会長 石野健夫

4月 15支部となる
第1回酒害相談員講習会実施 35名受講



第1回終了証

日程表

日	時	場	講	講	講
1	10:00	岸和田市民会館	開会式	岸和田市民会館	岸和田市民会館
2	10:00	岸和田市民会館	酒害相談員講習会	岸和田市民会館	岸和田市民会館
3	10:00	岸和田市民会館	酒害相談員講習会	岸和田市民会館	岸和田市民会館
4	10:00	岸和田市民会館	酒害相談員講習会	岸和田市民会館	岸和田市民会館
5	10:00	岸和田市民会館	酒害相談員講習会	岸和田市民会館	岸和田市民会館
6	10:00	岸和田市民会館	酒害相談員講習会	岸和田市民会館	岸和田市民会館
7	10:00	岸和田市民会館	酒害相談員講習会	岸和田市民会館	岸和田市民会館
8	10:00	岸和田市民会館	酒害相談員講習会	岸和田市民会館	岸和田市民会館
9	10:00	岸和田市民会館	酒害相談員講習会	岸和田市民会館	岸和田市民会館
10	10:00	岸和田市民会館	酒害相談員講習会	岸和田市民会館	岸和田市民会館
11	10:00	岸和田市民会館	酒害相談員講習会	岸和田市民会館	岸和田市民会館
12	10:00	岸和田市民会館	酒害相談員講習会	岸和田市民会館	岸和田市民会館
13	10:00	岸和田市民会館	酒害相談員講習会	岸和田市民会館	岸和田市民会館
14	10:00	岸和田市民会館	酒害相談員講習会	岸和田市民会館	岸和田市民会館
15	10:00	岸和田市民会館	酒害相談員講習会	岸和田市民会館	岸和田市民会館
16	10:00	岸和田市民会館	酒害相談員講習会	岸和田市民会館	岸和田市民会館
17	10:00	岸和田市民会館	酒害相談員講習会	岸和田市民会館	岸和田市民会館
18	10:00	岸和田市民会館	酒害相談員講習会	岸和田市民会館	岸和田市民会館
19	10:00	岸和田市民会館	酒害相談員講習会	岸和田市民会館	岸和田市民会館
20	10:00	岸和田市民会館	酒害相談員講習会	岸和田市民会館	岸和田市民会館
21	10:00	岸和田市民会館	酒害相談員講習会	岸和田市民会館	岸和田市民会館
22	10:00	岸和田市民会館	酒害相談員講習会	岸和田市民会館	岸和田市民会館
23	10:00	岸和田市民会館	酒害相談員講習会	岸和田市民会館	岸和田市民会館
24	10:00	岸和田市民会館	酒害相談員講習会	岸和田市民会館	岸和田市民会館
25	10:00	岸和田市民会館	酒害相談員講習会	岸和田市民会館	岸和田市民会館
26	10:00	岸和田市民会館	酒害相談員講習会	岸和田市民会館	岸和田市民会館
27	10:00	岸和田市民会館	酒害相談員講習会	岸和田市民会館	岸和田市民会館
28	10:00	岸和田市民会館	酒害相談員講習会	岸和田市民会館	岸和田市民会館
29	10:00	岸和田市民会館	酒害相談員講習会	岸和田市民会館	岸和田市民会館
30	10:00	岸和田市民会館	酒害相談員講習会	岸和田市民会館	岸和田市民会館
31	10:00	岸和田市民会館	酒害相談員講習会	岸和田市民会館	岸和田市民会館

全国大会：大阪

世間の出来事

内閣総理大臣 田中角栄

- ・第一次オイルショック
- ・金大中事件



6月 大阪府より助成金交付を受ける

9月 第1回近畿ブロック大会、岸和田市民会館にて開催

11月 第10回全日本断酒連盟全国(大阪)大会開催

大阪市立東淀川体育館
2500余名参加



大阪市立東淀川体育館



大阪府断酒会の出来事

会長 石野健夫

4月 21支部となる

6月 大阪精神保健協議会に加盟



1974 昭和49年

7

全国大会：横浜

世間の出来事

内閣総理大臣 三木武夫

- ・連続企業爆破事件
- ・小野田寛郎さん帰国
- ・長嶋茂雄選手引退





大阪府断酒会の出来事
会長 石野健夫

4月 24支部となる

9月 スウェーデンから断酒会研究のため来日



アルコール問題研究所にて懇談会開催

1975

昭和50年

9

全国大会：広島

昭和50年プロ野球順位	
セリーグ	パリーグ
1 広島	1 阪急
2 中日	2 近鉄
3 阪神	3 太平洋
4 ヤクルト	4 ロッテ
5 大洋	5 南海
6 巨人	6 日ハム

世間の出来事
内閣総理大臣 三木武夫

- ・ベトナム戦争終結
- ・沖縄国際海洋博覧会開催
- ・広島カープが初優勝



大阪府断酒会の出来事
会長 石野健夫

2月 国立久里浜病院にて厚生省主催のアルコール中毒者社会復帰推進指導員研修会出席

3月 近畿ブロック第1回ソフトボール大会が和歌山で開催され大阪・堺混成チーム参加

4月 30支部となる

5月 大阪府社会福祉協議会加盟

7月 優芯クラブ(女性酒害者の会)発足

8月 大阪断酒会を「大阪府断酒会」と改称

9月 大阪府断酒会10周年記念大会を大阪市中央公会堂にて開催 会則を改定しブロック制を導入

1976

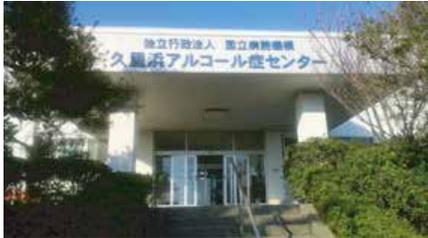
昭和51年

10

全国大会：高松

世間の出来事
内閣総理大臣 福田赳夫

- ・ロッキード事件 田中角栄前首相逮捕
- ・後楽園球場に人工芝
- ・鹿児島で日本初の五つ子誕生
- ・植村直己北極圏単独犬ゾリ横断

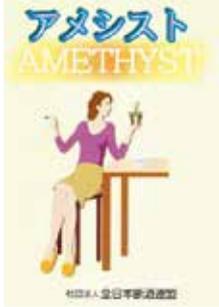



久里浜病院

大阪府断酒会の出来事
会長 石野健夫

3月 第1回一泊研修会 京都中心山荘で開催

4月 アメシスト(女性酒害者)の東京・大阪懇談会を東大阪市で開催



1977

昭和52年

11

全国大会：福岡

1977年生まれ	
安室奈美恵 (歌手)	
松たか子 (女優)	
市川海老蔵 (歌舞伎)	
雅山哲士 (大相撲)	
新井貴浩 (プロ野球)	
塚原直也 (体操)	

世間の出来事
内閣総理大臣 福田赳夫

- ・マイルドセブン発売開始
- ・ネッシー騒ぎ
- ・エルビス・プレスリー死去
- ・王貞治がハンク・アーロン抜く756号



大阪府断酒会の出来事
会長 石野健夫

3月 9ブロック33支部となる

4月 社団法人の認可を受け
「社団法人・大阪府断酒会」となる



5月 社団法人大阪府断酒会第1回通常総会
開催

1978
昭和53年
12

全国大会：高知

世間の出来事
内閣総理大臣 大平正芳

- ・キャンディーズ引退
- ・日中平和友好条約調印
- ・「空白の一日」江川事件




大阪府断酒会の出来事
会長 石野健夫

4月 ノルウェーから断酒会研究
のため来日
酒害相談員講習会など視察



1979
昭和54年
13

全国大会：静岡

世間の出来事
内閣総理大臣 大平正芳

- ・第二次オイルショック
- ・ドラえもん がんばれタブチくん
- ・全国に口裂け女の噂



大阪府断酒会の出来事
会長 石野健夫

3月 日本精神衛生連盟大会に
大阪府断酒会精神衛生功労賞
(団体の部)を受賞



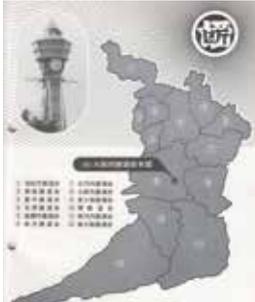
4月 各ブロックを地域断酒会に改編
12断酒会・56支部になる

1980
昭和55年
14

全国大会：松江

世間の出来事
内閣総理大臣 鈴木善幸

- ・モスクワ五輪不参加
- ・イエスの方舟事件
- ・ルービックキューブ

大阪府断酒会の出来事

会長 石野健夫

9月 大阪府断酒会15周年記念大会

大阪市中央公会堂で開催



1981
昭和56年
15

全国大会：名古屋

アルコール専門通院医療機関
小杉クリニック本院を開設



世間の出来事

内閣総理大臣 鈴木善幸

- ・中国残留孤児帰国
- ・神戸ポートピア博覧会
- ・疑惑の銃弾事件



大阪府断酒会の出来事

会長 石野健夫

4月 第10回酒害相談員講習会を
森ノ宮労働会館にて開催

(第1回から第10回まで受講者延べ445名)



森ノ宮労働会館



和歌山城

1982
昭和57年
16

全国大会：和歌山

世間の出来事

内閣総理大臣 中曽根康弘

- ・東北新幹線開通
- ・上越新幹線開通
- ・500円硬貨登場



大阪府断酒会の出来事
会長 石野健夫

3月 大阪府断酒会第10回一泊研修会開催

9月 近畿ブロック第10回大会並びに大阪府断酒会17周年記念大会開催

11月 第31回精神衛生全国大会にて大阪府断酒会 全国大会：福島として初めて厚生大臣賞を受賞

1983
昭和58年
17

世間の出来事
内閣総理大臣 中曽根康弘

- ・東京ディズニーランド開園
- ・日本海中部地震発生
- ・ファミリーコンピュータ発売
- ・おしんブーム



表彰状



NHKドラマ「おしん」



大阪府断酒会の出来事
会長 石野健夫

3月 大阪府断酒会主催第1回ソフトボール大会開催以降毎年2回開催

1984
昭和59年
18

世間の出来事
内閣総理大臣 中曽根康弘

- ・グリコ・森永事件
- ・エリマキトカゲ



全国大会：岡山



大阪府断酒会の出来事
会長 石野健夫

3月 大阪府断酒会主催で近畿ブロック協議会一泊研修会開催

9月 女性酒害者の昼例会が始まる

1985
昭和60年
19

世間の出来事
内閣総理大臣 中曽根康弘

- ・つくば科学博覧会開催
- ・日本航空ジャンボ機墜落
- ・阪神タイガースが初の日本一
- ・豊田商事事件



アメシスト原石



全国大会：長崎



生存者7人発見

大阪府断酒会の出来事
会長 石野健夫

3月 17断酒会・75支部となる

年	支部名	支部長	支部員数
1969	大阪府断酒会	石野健夫	17
1970	大阪府断酒会	石野健夫	25
1971	大阪府断酒会	石野健夫	35
1972	大阪府断酒会	石野健夫	45
1973	大阪府断酒会	石野健夫	55
1974	大阪府断酒会	石野健夫	65
1975	大阪府断酒会	石野健夫	75

9月 大阪府断酒会20周年記念大会を
大阪厚生年金会館にて開催

11月 大阪府断酒会二十周年記念誌発行

1986
昭和61年
20

全国大会：札幌

世間の出来事
内閣総理大臣 中曽根康弘

- ・男女雇用機会均等法施行
- ・東京サミット開催
- ・日本社会党・土井たか子
日本初の女性党首



大阪厚生年金会館

大阪府断酒会の出来事
会長 石野健夫

3月 精神保健法成立

9月 大阪府断酒会21周年記念大会を
大阪市中央公会堂にて開催



1987
昭和62年
21

全国大会：三重

世間の出来事
内閣総理大臣 竹下 登

- ・バブル景気本格化
- ・国鉄分割民営化でJR発足
- ・マイケル・ジャクソン初来日



地価変動率と価格の推移(住宅地)

平均価格 (円/㎡)	平均変動率(%)
昭和58年 (1983)	179,000 +2.5
昭和59年 (1984)	181,900 +1.4
昭和60年 (1985)	185,400 +1.8
昭和61年 (1986)	198,200 +6.2
昭和62年 (1987)	346,600 +71.0



大阪府断酒会の出来事
会長 石野健夫

10月 大阪府断酒会、保健文化賞を受賞



スウェーデンより断酒団体(レンカナ)来阪



1988
昭和63年
22

全国大会：広島

世間の出来事
内閣総理大臣 竹下 登

- ・青函トンネル開通
- ・瀬戸大橋開通
- ・南海ホークス、阪急ブレーブスが球団売却



第15回家族の集い



大阪府断酒会の出来事

会長 石野健夫

2月 第1回大阪アメリシストの集い
一日研修会開催 以降毎年開催

* 精神障害者共同作業所運営助成事業開始

10月 第26回全国(大阪)大会を
大阪城ホールで開催
本大会に6317名 前日関連行事に約1200名参加



世間の出来事

内閣総理大臣 宇野宗佑 海部俊樹




・ 昭和天皇崩御



・ 消費税(3%)施行

・ 参院で与野党逆転 ねじれ国会

・ 天安門事件

・ ベルリンの壁崩壊

・ 平成に改元



・ 美空ひばり
松下幸之助
手塚治虫
死去





日本レコード大賞：Wink「寂しい熱帯魚」
プロ野球優勝：セ・巨人(日本一) パ：近鉄
大相撲横綱：千代の富士、北勝海、大乃国
米国大統領：ジョージ・H・W・ブッシュ

大阪府断酒会機関紙「なにわ」読者の広場 作品募集中

短歌・川柳・書・挿絵他

広報宣伝部





大阪府断酒会の出来事
会長 瀨野良造

6月 全日本断酒会連盟総会を豊中市で開催



1990

平成2年

24

全国大会：京都



3代目会長 瀨野良造(故人)

世間の出来事
内閣総理大臣 海部俊樹

- ・国際花と緑の博覧会(花博)
- ・ドイツ再統一
- ・雲仙普賢岳噴火



花博・いのちの塔

大阪府断酒会の出来事
会長 瀨野良造

3月 全断連公認 第1回関西断酒会学校を富田林市願昭寺で開催 以後毎年開催

9月 大阪府断酒会25周年記念大会を大阪市中央公会堂にて開催

11月 全断連発行「指針と規範」に基づき役員勉強会を開催



1991

平成3年

25

全国大会：新潟

府断会員数：1255

世間の出来事
内閣総理大臣 宮沢喜一

- ・バブル経済崩壊
- ・湾岸戦争
- ・ソビエト連邦解体
- ・信楽高原鉄道列車衝突事故



湾岸戦争

大阪府断酒会の出来事
会長 瀨野良造

5月 協議会制を導入 7協議会・54断酒会 大阪市断酒会を細分 各区一断酒会となる



1992

平成4年

26

全国大会：奈良

府断会員数：1307

世間の出来事
内閣総理大臣 宮沢喜一

- ・山形新幹線開通
- ・ハウステンボス開業
- ・学校週休二日制始まる



ハウステンボス

大阪府断酒会の出来事

会長 濱野良造

9月 全日本断酒連盟「指針と規範」初版発行



10月 第41回精神保健全国大会が大阪国際センターにて開催され大阪府断酒会が運営委員を努める

1993

平成5年

27

全国大会：大分

世間の出来事

内閣総理大臣 細川護熙

- ・レインボーブリッジ開通
- ・ランドマークタワー完成
- ・インド大地震




第4回断酒親交クラブの集い

府断会員数：1299

大阪府断酒会の出来事

会長 濱野良造

7月 全断連総会の決定を受けて記録映画「もうひとつの人生」の取材

9月 家族のための「回復への指針」発行

11月 大阪を舞台に映画の撮影始まる



第5回断酒親交クラブの集い

1994

平成6年

28

全国大会：鳥取

世間の出来事

内閣総理大臣 羽田 孜 村山富市




- ・自社さ連立政権発足
- ・松本サリン事件



府断会員数：1279

大阪府断酒会の出来事

会長 濱野良造

2月 阪神淡路大震災の義援金窓口を大阪府断酒会が担当

5月 記録映画「もうひとつの人生」完成



1995

平成7年

29

全国大会：兵庫開催予定も震災の為翌年に延期



世間の出来事

内閣総理大臣 村山富市

- ・阪神淡路大震災
- ・地下鉄サリン事件
- ・戦後50周年



府断会員数：1298

大阪府断酒会の出来事

会長 濱野良造

3月 第24回酒害相談員講習会開催
(第1回～24回受講者延べ1185名)

9月 大阪府断酒会30周年記念大会を
大阪市中央公会堂で開催



1996
平成8年
30

全国大会：兵庫
ワールド記念ホール

全国大会：徳島
アスティとくしま

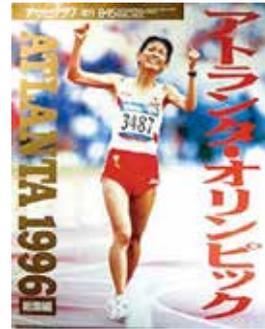


府断会員数：1370

世間の出来事

内閣総理大臣 橋本龍太郎

- ・ペルー日本人大使館人質事件
- ・O-157食中毒事件
- ・狂牛病騒動



大阪府断酒会の出来事

会長 菅原春雄

2月 地域断酒会役員一日勉強会を
西成区民センターで行う(232名参加)



西成区民センター

1997
平成9年
37

全国大会：熊本
パークドーム熊本



4代目会長 菅原春雄氏

府断会員数：1404

世間の出来事

内閣総理大臣 橋本龍太郎

- ・消費税5%に引き上げ
- ・神戸連続児童殺傷事件
- ・香港が中国に返還
- ・臓器移植法が成立
- ・東京湾アクアライン開業



5月 大阪府断酒会施行細則を改定
協議会の呼称を連合会に改定

大阪府断酒会の出来事

会長 菅原春雄

1月 大阪府断酒会事務所を所在地
(八尾市若林町)に開設



4月 30年史発行 30周年記念大会を開催
するにあたり発行が決まっていたが
2年余りの歳月を要し発行された

6月 関西断酒学校を全断連主宰で
第7回断酒学校を引き継ぎ第8回
関西断酒学校として2泊3日で富田林市
の願昭寺にて開催 291名の入校者



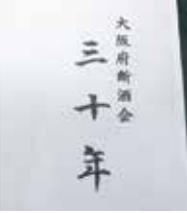
願昭寺

1998

平成10年

32

全国大会：旭川
旭川大雪アリーナ



府断会員数：1377

世間の出来事

内閣総理大臣 小渕恵三

- ・郵便番号7桁に
- ・明石海峡大橋開通
- ・和歌山毒物カレー事件
- ・長野オリンピック開催
- ・サッカーワールドカップに日本初出場
- ・参議院で与野党逆転
- ・北朝鮮が弾道ミサイルテポドン発射




大阪府断酒会の出来事

会長 堅田英雄

4月～5月 第27回酒害相談員講習会を大阪
市立労働会館で開催 68名受講

5月 大阪府断酒会親睦ソフトボール大会を
高石市鴨公園グラウンドで開催
12チーム(270名)参加

11月 全日本断酒連盟主催 大阪府断酒会運営
第1回近畿ブロック断酒学校(関西断酒学校改め)
貝塚市大阪府立少年自然の家にて2泊3日で開催
310余名参加者



5代目会長 堅田英雄氏

1999

平成11年

33

全国大会：川崎
とどろきアリーナ



府断会員数：1377

世間の出来事

内閣総理大臣 小渕恵三

- ・ノストラダムスの予言外れる
- ・2000年問題に脅える
- ・東海村JOC臨界事故



大阪府立少年自然の家

大阪府断酒会の出来事

会長 堅田英雄

2月 地域断酒会役員勉強会を大阪市中央区民センターで開催 290余名参加

4月～6月 第28回酒害相談員講習会を大阪市立労働会館で開催 78名受講

4月 大阪府ソフトボール大会を八尾市 全国大会：福岡久宝寺グラウンドで12チーム(245名)参加で開催 国際センター

5月 和歌山市せせらぎ公園グラウンドで行われた近畿ブロックソフトボール大会に大阪府断酒会より7チーム参加

7月 医療スタッフと断酒会の会談を大阪市立労働会館に於いて開催 48名参加

9月 大阪府断酒会創立34周年記念大会を大阪狭山市文化会館 SAYAKAホールにて開催 1127名参加

11月 第2回近畿ブロック断酒学校開催 307名参加

12月 大阪府断酒会ソフトボール大会開催 245名参加

2000

平成12年

34

世間の出来事

内閣総理大臣 森 喜郎

- ・二千円札発行
- ・神の国発言⇒神の国解散
- ・三宅島噴火
- ・20世紀終わる
- ・高橋尚子シドニー五輪金メダル



SAYAKAホール



府断会員数：1385

大阪府断酒会の出来事

会長 堅田英雄

4月 摂津市断酒会発足

7月 第2回医療スタッフと断酒会との懇談会を大阪市立労働会館に於いて開催 40名参加

10月 第38回全国(大阪)大会を門真市なみはやドームで開催 行政・医療・全国各地より会員・家族並びに一般市民5300余名参加

2001

平成13年

35

世間の出来事

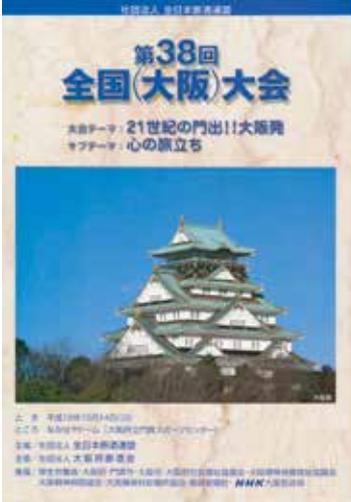
内閣総理大臣 小泉純一郎

- ・ユニバーサルスタジオ開園
- ・サッカーくじ(toto)
- ・アメリカ同時多発テロ
- ・東京ディズニーシー開園





全国大会準備風景



11月 全日本断酒連盟主催 大阪府断酒会運営 第3回近畿ブロック断酒学校を貝塚市大阪府立少年自然の家に於いて2泊3日で開催 289名参加

12月 大阪府断酒会親睦ソフトボール大会(近畿ブロック予選)を高石市鴨グラウンドで開催 12チーム(231名)参加

府断会員数：1358

大阪府断酒会の出来事

会長 堅田英雄

2月 地域断酒会役員勉強会を大阪市中央区民センターで開催 283名参加

2月 第14回アメシストの集い1日研修会を大阪市立労働会館にて開催 105名参加

4月～6月 第30回酒害相談員講習会を大阪市立労働会館で開催 57名受講

9月 大阪府断酒会創立36周年記念大会を大阪市中央区アビオ大阪で開催 926名参加

11月 第4回近畿ブロック断酒学校開催 272名参加

2002

平成14年

36

全国大会：埼玉
スーパーアリーナ

世間の出来事

内閣総理大臣 小泉純一郎

- ・日朝首脳会談
- ・日本人拉致被害者が北朝鮮から帰国
- ・サッカーワールドカップ日韓共催
- ・E C圏内で統一通過「ユーロ」流通開始



大阪市立中央区民センター



さいたまスーパーアリーナ



府断会員数：1308

大阪府断酒会の出来事

会長 堅田英雄

2月 第15回アメシストの集い1日研修会を大阪市立労働会館にて開催 120名参加

2月 地域断酒会役員勉強会を大阪市中央区民センターで開催 328名参加

4月～6月 第31回酒害相談講習会を大阪市立労働会館で開催 93名受講

5月 大阪府断酒会親睦ソフトボール大会を八尾市久宝寺グラウンドで開催 11チーム230名参加

7月 第4回医療スタッフと断酒会との懇談会を大阪市立労働会館にて開催 61名参加

9月 大阪府断酒会創立37周年記念大会を高槻市現代劇場で開催 864名参加

11月 第5回近畿ブロック断酒学校開催 299名参加

2003

平成15年

37

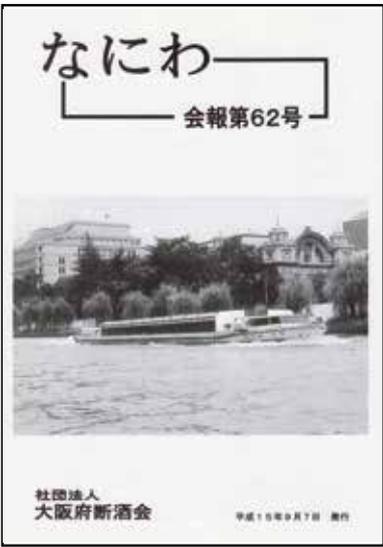
全国大会：愛知
レインボーホール

世間の出来事

内閣総理大臣 小泉純一郎

- ・アメリカ・イラク戦争
- ・自衛隊イラク派遣
- ・日本郵政公社が営業開始
- ・地上デジタル放送開始





なにわ
会報第62号

社団法人
大阪府断酒会

平成15年9月7日 発行

府断会員数：1311

大阪府断酒会の出来事

会長 堅田英雄

2月 第16回アメシストの集い1日研修会を大阪市立労働会館にて開催 137名参加

2月 地域断酒会役員勉強会を大阪市中央区民センターで開催 342名参加

4月～6月 第32回酒害相談講習会を大阪市立労働会館で開催 73名受講

4月 大阪府断酒会親睦ソフトボール大会を八尾市久宝寺グラウンドで開催 11チーム245名参加

7月 第5回医療スタッフと断酒会の懇談会を大阪市立労働会館にて開催 73名参加

9月 近畿ブロック(大阪)大会を高槻市現代劇場で開催 1229名参加

11月 第6回近畿ブロック断酒学校開催 269名参加

府断会員数：1288

2004
平成16年
38

世間の出来事

内閣総理大臣 小泉純一郎

- ・九州新幹線開通
- ・楽天ゴールデンイーグルスプロ野球参入
- ・スマトラ沖地震



ルートの概要図

大阪府断酒会の出来事

会長 堅田英雄

2月 地域断酒会役員勉強会を大阪市中央区民センターで開催 325名参加

4月～6月 第33回酒害相談講習会を大阪市立労働会館で開催 73名受講

8月 大阪府断酒会創立39周年記念大会を門真市民会館で開催 1229名参加

9月 全断連第42回全国(札幌)大会に69名参加

11月 第7回近畿ブロック断酒学校開催 312名参加

府断会員数：1226

2005
平成17年
39

世間の出来事

内閣総理大臣 小泉純一郎

- ・JR福知山線脱線
- ・愛・地球博(愛知)開催
- ・プロ野球セ・パ交流戦開幕
- ・郵政民営化法案成立



第42回全国札幌大会
メインテーマ：新酒文化は社会の宝
ご案内

大阪府断酒会の出来事

会長 堅田英雄

2月 大阪府断酒会顧問 今道裕之先生ご逝去

3月 地域断酒会役員勉強会を大阪市中央区民センターで開催 305名参加

4月～6月 第34回酒害相談講習会を大阪市立労働会館で開催 101名受講

9月 大阪府断酒会創立40周年記念大会を堺市国際障害者交流センターで開催 1129名参加

10月 全断連第43回全国(広島)大会に288名参加

11月 第8回近畿ブロック断酒学校開催 303名参加

府断会員数：1217

2006
平成18年
40

世間の出来事

内閣総理大臣 安倍晋三

- ・ホリエモン事件
- ・村上ファンド事件
- ・ワールドベースボールクラシック



大阪府断酒会の出来事

会長 野村貞夫

3月 地域断酒会役員勉強会を大阪市中央区民センターで開催 305名参加

4月～6月 第35回酒害相談講習会を大阪市立労働会館で開催 75名受講

9月 大阪府断酒会創立41周年記念大会 773名参加 全国大会：仙台

10月 全断連第44回全国(宮城)大会に86名参加 仙台市体育館

11月 第9回近畿ブロック断酒学校開催 301名参加



6代目会長 野村貞夫氏

2007
平成19年
41

世間の出来事

内閣総理大臣 福田康夫

- ・新潟中越沖地震
- ・日本郵政公社民営化
- ・参議院議員選挙で民主党圧勝



府断会員数：1169

大阪府断酒会の出来事

会長 野村貞夫

3月 地域断酒会役員勉強会を大阪市中央区民センターで開催 295名参加

4月～6月 第36回酒害相談講習会を大阪市立中央青年センターで開催 128名受講

8月 大阪府断酒会創立42周年記念大会を大阪市中央公会堂で開催 858名参加

9月 全断連第45回全国(滋賀)大会 430名参加

11月 第10回近畿ブロック断酒学校開催 305名参加

11月 11月10日「断酒宣言の日」難波高島屋前で飲酒運転根絶の呼びかけ及び断酒会の宣伝活動開始

2008
平成20年
42

世間の出来事

内閣総理大臣 麻生太郎

- ・リーマンショック
- ・オバマが史上初黒人大統領
- ・0系新幹線引退



全国大会：滋賀 滋賀県立体育館
府断会員数：1137

大阪府断酒会の出来事

会長 野村貞夫

1月 地域断酒会役員勉強会を大阪市中央区民センターで開催 295名参加

4月～6月 第37回酒害相談講習会を大阪市立中央青年センターで開催 88名受講

9月 大阪府断酒会創立43周年記念大会を大阪市中央公会堂で開催 774名参加 全国大会：岡山

10月 全断連第46回全国(岡山)大会に334名参加 桃太郎アリーナ

11月 第11回近畿ブロック断酒学校開催 296名参加




2009
平成21年
43

世間の出来事

内閣総理大臣 鳩山由紀夫

- ・新型インフルエンザ流行
- ・裁判員制度始まる
- ・阪神難波線開業



kokoro-osaka.jp

*こころの健康総合センターで「自殺防止予防対策基金事業」他開始

府断会員数：1134

大阪府断酒会の出来事

会長 野村 貞夫

1月 地域断酒会役員勉強会を大阪市中央区民センターで開催

4月～6月 第38回酒害相談講習会を大阪市中央区アネックスパル法円坂で開催 83名受講

8月 大阪府断酒会顧問 小杉好弘先生ご逝去

9月 大阪府断酒会創立44周年記念大会 堺市ビッグ・アイで開催 779名参加

10月 全断連第44回全国(和歌山)大会に496名参加

11月 第12回近畿ブロック断酒学校開催 302名参加

2010

平成22年

44

全国大会：和歌山
ビッグホール




ビッグ・アイ ビッグホール

世間の出来事

内閣総理大臣 菅 直人

- ・フィリピン大統領にアキノ氏
- ・食べるラー油、3D映画
- ・尖閣諸島中国漁船衝突事件



府断会員数：1036

大阪府断酒会の出来事

会長 伊藤 聡

1月 地域断酒会役員勉強会を大阪市城東区民ホールで開催 320名参加

4月～6月 第39回酒害相談講習会を東大阪市立市民会館で開催 66名受講

9月 全断連第41回近畿ブロック(大阪)大会 堺市ビッグ・アイで開催 1125名参加

10月 全断連第48回全国(静岡)大会 226名参加

11月 第13回近畿ブロック断酒学校開催 309名参加

2011

平成23年

45

全国大会：静岡
グランシップ

世間の出来事

内閣総理大臣 野田佳彦

- ・東日本大震災
- ・大相撲八百長問題発覚
- ・なでしこジャパン初優勝
- ・九州新幹線鹿児島ルート全面開通







7代目会長 伊藤聡氏
東大阪市立市民会館
府断会員数：1048

大阪府断酒会の出来事

会長 伊藤 聡

2月 地域断酒会役員勉強会を大阪市西区民センターで開催 280名参加

4月～6月 第38回酒害相談講習会を東大阪市市民会館で開催 62名受講

9月 大阪府断酒会創立46周年記念大会を堺市ビッグ・アイで開催 634名参加

10月 全断連第49回全国(兵庫)大会に419名参加

11月 第14回近畿ブロック断酒学校開催 306名参加

2012

平成24年

46

全国大会：兵庫
ワールド記念ホール

世間の出来事

内閣総理大臣 安倍晋三

- ・東京スカイツリー開業
- ・「日本維新の会」結成
- ・新東名高速道路開通
- ・民国連立終り、自公連立政権






ワールド記念ホール
府断会員数：1009
*大阪府断事務所「自殺対策の常設相談窓口」を開設

大阪府断酒会の出来事

会長 伊藤 聡

2月 地域断酒会役員勉強会を大阪市
港区民センターで開催 287名参加

4月～6月 第41回酒害相談講習会を東大阪
市立市民会館で開催 84名受講

9月 大阪府断酒会創立47周年記念大会
堺市ビッグ・アイで開催 1244名参加

11月 アル法パレード実施

11月 全断連第50回全国(沖縄)大会に124名参加

11月 第15回近畿ブロック断酒学校開催 266名参加

2013

平成25年

47

全国大会：沖縄
コンベンションセンター

世間の出来事

内閣総理大臣 安倍晋三

- ・「富士山」文化遺産登録
- ・障害者雇用率を2%に引き上げ
- ・アルコール健康障害対策基本法成立







府断会員数：975

大阪府断酒会の出来事

会長 伊藤 聡

2月 地域断酒会役員勉強会を大阪市
港区民ホールで開催 306名参加

4月 社団法人大阪府断酒会を改め
「一般社団法人大阪府断酒会」発足

4月～6月 第42回酒害相談講習会を東大阪
市民会館で開催 63名受講

9月 大阪府断酒会創立48周年記念大会
堺市ビッグ・アイで開催 641名参加

10月 全断連第51回全国(釧路)大会 71名参加

11月 エル大阪に於いてアルコール関連問題
啓発フォーラムを開催

11月 第16回近畿ブロック断酒学校開催 245名参加

2014

平成26年

48

全国大会：釧路
国際交流センター

世間の出来事

内閣総理大臣 安倍晋三

- ・あべのハルカス開業
- ・消費税8%に引き上げ
- ・広島市に豪雨土砂災害






府断会員数：938

各地で開催された酒害相談

大阪府断酒会の出来事

会長 伊藤 聡

2月 地域断酒会役員勉強会を大阪市
西区民センターで開催 306名参加

4月～6月 第43回酒害相談講習会を東大阪
市立市民会館で開催 70名受講

9月 大阪府断酒会創立49周年記念大会を
堺市ビッグ・アイで開催 617名参加

10月 全断連第52回全国(山口)大会に112名参加

11月 第17回近畿ブロック断酒学校開催 250名参加

2015

平成27年

49

全国大会：山口
維新百年公園

世間の出来事

内閣総理大臣 安倍晋三

- ・改正公職選挙法(18歳から投票)成立
- ・ラグビーW杯で、日本が歴史的快挙！
- ・戦後70年






府断会員数：929

全国(山口)大会

大阪府断酒会

(北摂断酒連合会)

- ・茨木市断酒会
- ・高槻市断酒会
- ・島本断酒会
- ・吹田市断酒会
- ・摂津市断酒会

(豊能断酒連合会)

- ・池田市断酒会
- ・豊中市断酒会
- ・箕面断酒会

(北河内断酒連合会)

- ・交野市断酒会
- ・枚方断酒会
- ・門真市断酒会
- ・守口市断酒会
- ・大東市断酒会
- ・寝屋川市断酒会

(中河内断酒連合会)

- ・東大阪断酒会
- ・八尾市断酒会

(南河内断酒連合会)

- ・大阪狭山市断酒会
- ・藤井寺断酒会
- ・河内長野市断酒会
- ・松原市断酒会
- ・富田林断酒会
- ・羽曳野市断酒会

(泉州断酒連合会)

- ・和泉断酒会
- ・岸和田断酒会
- ・泉大津断酒会
- ・高石市断酒会
- ・泉佐野市断酒会
- ・阪南新生断酒会
- ・貝塚市断酒会

(堺市断酒連合会)

- ・堺市鳳断酒会
- ・堺市東断酒会
- ・堺市金岡断酒会
- ・堺市深井断酒会
- ・堺市宿院断酒会
- ・堺市美原断酒会
- ・堺市泉北断酒会

(大阪市断酒連合会)

- ・大阪市旭断酒会
- ・大阪市此花断酒会
- ・大阪市大正断酒会
- ・大阪市浪速断酒会
- ・大阪市東成断酒会
- ・大阪市福島断酒会
- ・大阪市阿倍野断酒会
- ・大阪市城東断酒会
- ・大阪市中央断酒会
- ・大阪市西断酒会
- ・大阪市東住吉断酒会
- ・大阪市港断酒会
- ・大阪市生野断酒会
- ・大阪市住之江断酒会
- ・大阪市鶴見断酒会
- ・大阪市西成断酒会
- ・大阪市東淀川断酒会
- ・大阪市都島断酒会
- ・大阪市北断酒会
- ・大阪市住吉断酒会
- ・大阪市天王寺断酒会
- ・大阪市西淀川断酒会
- ・大阪市平野断酒会
- ・大阪市淀川断酒会

編集後記

荒木 大介 (吹田市断酒会)

50年史製作の「報道をたどる」を作成にあたって、大阪府断酒会 事務所にあった新聞の切り抜きに助けられました。断酒会に長くいると、新聞記事があっても取っておくことのむつかしさは実感しています。初心を忘れるなど自分に言い聞かせ、新聞切り抜きをされた方に感謝致します。

長谷川 武 (東大阪断酒会)

「50年史の作成に関わっていただきたい」その一言から始まった50年史の編集作業であったがやっと大詰め迄来た。色々な制約のある中、先人の苦勞を感じつつ、編集を終わる事が出来ました。この事業に関わる事が出来た事に感謝し、取材に協力して頂いた方々、編集に関わって頂いた方々、及び編集部員に厚くお礼申しあげます。

竹中 勉 (大阪市西淀川断酒会)

巻末年表グラフ担当しました。世間の歴史と自分の酒害を振り返りながら並行して、大阪府断酒会の歴史を知ることができました。素晴らしい編集委員の仲間と、いい体験させて戴けたと感謝します。

須藤 恒雄 (河内長野市断酒会)

編集作業は初めてのことであったが、大阪府断酒会の歴史を知ることができた貴重な時間だった。また、編集作業の大変さを知った。いずれにしても断酒を継続してこの作業が出来たことに感謝している。

藤川 憲一 (大阪市中央断酒会)

大阪府断酒会が50年を迎える内の半分ほどは色々と断酒活動で関係を持ってきました。これからも皆様と断酒活動を頑張ります。

山本 雅貴 (大阪市生野断酒会)

今回編纂の一端を関わらせて頂き、先達の皆様の多大な尽力に触れることができました。断酒会草創期の出来事を調べたことを、今後の日々の断酒の糧にして行きたいと思っております。



大阪府断酒会五十年

発行 平成28年9月1日

発行人 伊藤 聡

発行所 一般社団法人 大阪府断酒会

〒581-0038 大阪府八尾市若林町1-70-1

八尾南樋口ビル1号館203号

<http://oosakafudann.sunnyday.jp/>

TEL 072-949-1229

FAX 072-933-1220

E-mail:fudanshu@kawachi.zaq.ne.jp

編集 50年史製作委員会

印刷所 (有)大阪印刷社 06-6441-6161

